

初段

大序 仙洞御所の段

忠なるかな忠、信なるかな信、勾踐の本意を達す陶朱公、功なり名遂げて身退く

例をこゝに唐倭、四海漸々穩やかに、皆白旗と時めきて、武威はますく盛んなり

仙洞の御所後白河の法皇が寵臣左大臣の左大将藤原朝方、君の御覚えよきまゝに、依怙鼻肩の沙汰大方ならず、各々胸におさめある

程もあらせず源氏の大将、源九郎判官義経、院参のその粧ひ、派手を尽くせし太刀飾り

供は武蔵坊弁慶、大紋の袖立烏帽子、僧衣を憚る出で立ちは、実にも由々しく見えにける

左大将見やり給ひ

「いかに義経、この度八島の合戦の様子、法皇詳しく

聞こし召さず、安徳帝御入水、平家一門の最期、つづさに申し上げよ」

とある

義経『はつ』と承り

「さん候。この度の戦ひ、平家は千騎、義経の勢はわづか四百余騎。只事にては勝つ事なしと奇策をめぐらし、不時に攻めかくれば、あわてふためき平家の軍勢、船に取り乗り沖中へ天皇を遇し奉る。その時城に火を放ち、明りに眼させしやらん、能登守教経小船に乗り移り、希代の弓力引詰め、差し詰め射たる矢先は佐藤継信あばらに受け、馬より下にどうど落つ。弟佐藤忠信が射返す矢先は敵味方、その日の軍はさつと引く。明ければ敵より出す扇、与市宗高射て落す、箕尾谷景清鏖引き、敵が感ずる味方が誉むる、されども源氏は勝軍。平家は軍兵討ちなされ能登守教経、安芸太郎同じく次郎、二人を左右に引狭み、海へかつぱと飛び入つたり。新中納言知盛も御所の御船の御供と、これもさんぶと入水して果つ。安徳帝の御事は、

やはかと存ぜし油断の隙、二位の尼上御供し、海へ入り給ふと聞いたるばかり。御骸をも求め得ず、女院ばかり助かり給ふ次第にて候」

といときはやかに申し上ぐ

朝方苦つたる気色にて

「それ程の功ある義経、兄頼朝に对面叶はず、何故腰越より追ひ返されしぞ。その科を言へ、聞かん」

と聞くより

弁慶進み出で

「わが君のためには御兄なれど、ぬるい生まれの蒲冠者範頼卿、軍の手柄なきまゝに、頼朝公へしかかくと秘かな讒言。それと気づかぬ鎌倉殿も無詮議」と言はせも果てず

「シヤ、黙れ弁慶。たとへ讒者の業にもせよ、一旦の

兄の命申し開かず。腰越より帰りしは、弟の義経さへあの通りと世上の見せしめ。わが心中も弁へず鹿忽の

雑言、尾籠至極」

と戒むれば

「ホ、オ、神妙なり義経。軍の次第を奏聞して、御前よろしく計らはん」

と表面はぬつべり取り持ち顔、御殿間深く入りける小菰の影より左大臣朝方の諸大夫、主に劣らぬ人畜の、苗字も猪熊大之進

「これく義経殿、御油断々々々。国治まつたとは言ひながら平家の残党、小松の三位維盛が奥方若葉の内侍、そのまゝにおかずとも、なぜ片付けてしまはれぬ」

「ホ、オ何事かと存ぜしに、女童の事、何万人あるとても天下の妨げになり申さぬ」

「ナニ、妨げになり申さぬ。ム、それならばこつちも勝手、御主人朝方公、その若葉の内侍に御執心」

と皆まで言はせず武蔵坊

「ヤアならぬく、平家方の女房を秘かに引き入れるとは、怪しの振舞ひ」

「ヤア、しやらくさい、おけく。さ言ふ義経は平大納言時忠の娘賀ならずや。ム、ム知れた、それでは若

葉の内侍をうまくとちえく喰つたな」

「ヤアちえく喰つたとは、我が君を雀の様に抜かしたな。こつちが鳥なら、おのれは蠅、ぶうく抜かさず引込め」

と引搦んでちよいと放る

音はどつさり、

「アイタ、ハ、ハ、ハ、」

「ヤレ荒立つるな武蔵坊、しされく」

と制する折から

御座の間の御簾捲き上げ左大将朝方、あやしの箱引抱

へ、くわんくたるその風情

「ヤアく義経、敬つて受け給はれ。桓武天皇雨乞ひの時より、禁廷に留め置く初音と名付けたこの鼓。義経兼ねて望む由聞こし召し及ばれ、この度の軍の御恩

賞に賜はるぞ、拝見せよ」

と差し出だす

義経『はつ』と頭を下げ

「数ならぬ身に及びなき願ひ、雨乞ひに用ゆる鼓、軍

のためにと存ずるところ、ありがたしく」

と箱押し戴けば

「いやとよ、この鼓の裏皮は義経、表皮は頼朝。君に忠勤を抜きんずる義経を追ひ返せし頼朝はまさしく朝敵。鼓を打てとは、頼朝を討てとの院宣なり」

と理を押し枉げて兄弟仲、同士討ちさせてしまはん企み義経『はつ』と当惑し、差しうつむいて居給ひしが

「コハ、日頃の異なる法皇の勅命、たとへ叡慮に背くとも兄を討つ事存じもよらず」

と差し戻せば

朝方いよくしたり顔

「勅命背けば汝もまた、朝敵なるが合点か」

と無理と非道に言ひ枉ぐる

堪り兼ねて武蔵坊

「法皇様は天下の鏡、そんな無理を言はつしやれば、

天下中が皆無理言ふが御承知か」

と立ち騒ぐ

義経はつたと睨ませ給ひ

「最前より無礼の段々、わが目通り叶はず、退出せ

よ」

と叱りつくれば

猪熊は

「よい気味、よい気味」

とほくそづくを

目も掛けず、朝方に打ち向ひ

「日頃の懇望、かへつて仇となる鼓。申し受けねば

朝敵、拝領すれば兄に敵対。この上は拝領申しても

打ちさへせねば義経が、身の誤りにならぬ鼓。拝領

申し奉る」

と鼓を取つて退出す

御手の中に朝方が、悪事を調べのしめくゝり

実にも名高き大将と、末世に仰ぐ篤美の、強く優なるそ

の姿、一度に開く千本桜、栄え久しき

のためにと存ずるところ、ありがたしく」

と箱押し戴けば

「いやとよ、この鼓の裏皮は義経、表皮は頼朝。君に忠勤を抜きんずる義経を追ひ返せし頼朝はまさしく朝敵。鼓を打てとは、頼朝を討てとの院宣なり」

と理を押し枉げて兄弟仲、同士討ちさせてしまはん企み義経『はつ』と当惑し、差しうつむいて居給ひしが

「コハ、日頃の異なる法皇の勅命、たとへ叡慮に背くとも兄を討つ事存じもよらず」

と差し戻せば

朝方いよくしたり顔

「勅命背けば汝もまた、朝敵なるが合点か」

と無理と非道に言ひ枉ぐる

堪り兼ねて武蔵坊

「法皇様は天下の鏡、そんな無理を言はつしやれば、

天下中が皆無理言ふが御承知か」

と立ち騒ぐ

義経はつたと睨ませ給ひ

北嵯峨の段

君が代や

蘭省の花の時、錦帳の内にかしづかれし、小松三位維盛の御台若葉の内侍、若君六代御前、平家都を落ちしより、今は廬山の隠れ里、北嵯峨の草庵に、親子諸共身を忍び

仕馴れぬ業も仏の行と、谷の流れを水桶に、主の尼と差し荷ひ、庵の内に立ち帰り

「これ申し御台様、わしが一日たがくするを笑止がつて、荷ひの片端お手伝ひなされ、それくお肩が痛

さうな。時世とておいとしぼや。あれ、何聞いてやら

六代様のにこくと笑ふてぢや。ようお留守なされた

なう」

とほたく言ふてあしらへば

御台所も打ち萎れ

「知りやる通り夫の維盛様、都を開き給ひしよりこの庵に親子諸共長々の世話になるも、そなたが昔お館に奉公しやつた少しの所縁。維盛様も西海の軍に海へ沈み、お果てなされたとも、また生きてござることも、様々の噂なれども、都をお立ちなされた日を御命日と思ふてゐる。殊に今日は舅君重盛様の御命日なれば、心ばかりの香花取つて鬨伽の水も備へんため、手づから水を汲みました。取り分けこの月はお祥月、昔の形で回向せば、せめて仏へ追善」

と狭布の細布身狭なる、さもしき小袖脱ぎ捨て、卯の花色の二つ襟、うきに憂き身の数々は十二単の薄紅梅、思ひの色や緋の袴、いでそよ元は大内に宮仕へせし晴れの衣、引き繕ひ

蒔絵すつたる手箱より、重盛公の絵像を取り出し、さらしくと仏間にかけて手を合はせ

「小松内府浄蓮大居士、仏果菩提」

と回向に暫し時移る

外は春めく物売声

「菅笠、加賀笠」

ゆすく一荷打ちかたげ

「笠をお召しなされぬか」

と門口より差し覗けば

尼は驚き仏間の間の明り障子を立ち切つて

「オ、とでもない。尼の内に菅笠がなんであるぞいの。胡散な和郎ぢや」

と叱られて

「ア、イヤお氣遣ひな者でなし。私でござる」

と笠取つて

入るを見れば小金吾武里

御台所は『それ』と飛び立つばかり

「さあくこゝへ」

とありければ

小金吾も頭をさげ

「まづは御台様にも御健勝。若君六代様も御機嫌よき

御顔を拝し、大悦仕る」

と暫し涙に暮れけるが

「拙者めも御見継ぎのため、思ひついたる笠商売。前

髪立ちのこの小金吾、何が仕つけぬ商売なれば御推量下さるべし。さて、まづ申し上げたきは主君維盛卿の

御身の上。未だ御存命にて高野山に御入りと確かなる

都の噂。何卒拙者めも若君のお供をして高野に登り、

御親子の御対面」

と聞きもあへず御台は、夢見し心地にて

「なに、わが夫の高野とやらんに生きながらへてござるとや。それは嬉しやありがたや、六代ばかりと言はずとも、女子の上らぬ山ならば、麓まで自らも同道せ

よや武里」

と喜び涙にくれ給へば

「オ、維盛様御存命とお嬉しいはお道理。私もお供したけれど、足手まとひな年寄尼。ムそれなれば

日の長けぬうち一時も早いのが」

「ホ、成程々々、寸善尺魔のなき内に御親子共に御用

意

と急ぎ立つたる折こそあれ

表の方に人音足音

尼は心得いつもの通り仏壇の下戸棚、御台親子を押し入れ突きやる、その間もなく

朝方の諸太夫猪熊大之進

家来引具し柴の戸踏み退けどやくくと乱れ入り

「この庵室に維盛の御台若葉の内侍、倅六代諸共に匿ひ置く由、注進によつて召し取りに向ふたり。いづくに隠せし有様に白状せよ」

と星をさゝれて

主の尼、『はつ』と思へど素知らぬ顔

「これはまた御難題、縁も所縁もなき人を匿ふ筈もなし」

と言ふに

側から小金吾武里

「それは定めて庵室違ひでござりませう。他を御詮議遊ばせ」

と聞きもあへず

「ヤアこの前髪の青二才。うぬは何奴」

「ア、イヤ、私は菅笠売り」

「ヤア商人ならばとつとと帰れ。この年寄尼めを奥へ連れ行き、責め苛んで白状させん」

と主の尼が小腕取つて、ぐつと捻ち上げ

「ソレ家来共、拷問せよ」

とあらけなく、引立てく一間の中に入りける

小金吾は気も気ならず、『なんとせんかとせん』と奥口

窺ひ隙間を見て、御台親子を出だし参らせ

「幸ひの菅笠荷」

と細引かなぐり蓋押し開け、荷底に二人を入れ参らせ、

旅の用意の風呂敷包み、重盛公の絵像まで、取つては押

し込みさらへ込み

「してやつたり」

と領きつ、心も空に荷を打ち担げ、行かんとするを

二人の家来走り寄り

「ヤアこの荷底に挟まれた女の着る物、御台親子に極

まつた」

と立ちかゝる両人が肩骨掴んで引き退くる

「ヤア詮議させぬは曲者」

とすらりと抜いて斬りかゝる

引外しく、枋を振り上げ弓手馬手に叩き伏せ、急

所々を力にまかせ叩きのめせば

二人の家来、目鼻より血を出だした打ち回つて死してけり

「敵の帰らぬその内に」

と荷を打ち担げ声張り上げ

「菅笠、加賀笠、かさ編笠」

網を逃れて

堀川御所の段

出でて行く

君は八島の勝軍、国も静が舞扇、賑はふ御所は一条堀

川、静誉めるも君誉める、色めきてこそ見えにけれ

然る所へ遠見の役人、あわたゞしく罷り出で

「今日、大津坂本のほとりを巡見致せしに、忍びく

に鎌倉武士都へ入り込み候ふ中にも、土佐坊正尊海野

の太郎行永熊野詣でと偽り、わが君の討手に向ふと専

らの風聞。殊に只今、鎌倉の大老川越太郎重頼、わが

君へ直談とお次にひかへ罷りあり。いかゞ計らひ申

さんや」

尋ね申せば

卿の君

「心得ぬ事どもや。その川越太郎はみづからとは故ある人。土佐海野が討手の様子、知らさん為に來たりし

か。何にもせよ縁あれば苦しうない。お通し申せ。この旨君へも申し上げん」

と皆々引き連れ、奥の殿へぞ急ぎ行く

程なく入り来る武士は、鎌倉評定の役人川越太郎重頼、

大紋烏帽子さはやかに、年も五十路の分別盛り、広庇に入り來たれば

御主九郎判官、御装束を改められ、しづくと立ち出で

給ひ

「ヤア珍しや重頼、兄頼朝にもお褒りなく、百俵百司

もつゝがなしや」

と仰せに

『はつ』と頭を下げ

「まづは御健体を拝し恐悦至極。右大将頼朝公にも安

全に渡らせられ、諸大名も毎日の出勤、賢慮安んじ下

さるべし」

と申し上ぐれば

義経公

「シテその方は、海野土佐坊同役にて上りつらん。但

しはほかに用事ありや」

尋ねに

重頼

「さればの儀、君に御不審三ヶ条あり。只今一々お尋ね申し上げ、御返答によつて海野土佐坊と同役。恐れながら過言は御赦免なされ、尋ぬる子細御返答」

と申し上げれば

「ホ、才面白し。この義経に不審あらば、兄頼朝になり代はり過言は赦す、尋ねて見よ。申し開かん、遠慮無用」

と仰せに

なほも平伏し

「冥加に余る仕合はせ。とても事に御座改め下され

よ」

と席を立てば

大将も末座へ下がつて川越を、上座へこそは請ぜらる席改めて川越太郎

「いかに義経、平家の大敵を亡ぼし軍功を立てなが

穏やかならず、いづれも入水討死と世上の風聞幸ひに、一門残らず討ち取りしと、鷹首を以て欺きしは、一旦天下を静謐させん義経が計略。とあつて捨て置かれぬ大敵故、熊井、鷲尾、伊勢、片岡、究竟の輩を休息と偽り国々へ分け遣はし、忍びくくに討ち取る手筈。かく都に安座すれども心は今に戦場の苦しみ。兄頼朝は鎌倉山の星月夜と、諸大名にかしづかれ、月雪花のもてあそび。同じ清和の胤ながら、この義経朝には禁延に膝を屈し、夕には御代長久の基を謀る、いつか枕を安んぜん。あさましの身の上」と打ち萎れ給ふにぞ

『実(まじ)に理(ことわり)』と重頼も、思ひながらも役目の切羽(せきう)

「ウム、さてはその御述懐ある故、御謀叛思ひ立たれ

しか」

と言はせも立てず、くわつとせき上げ

「ヤア穢(けが)はし。謀叛とは何を以て、サ何を目当て」

と御気色変はれど

ちつとも恐れず

ら、腰越より追ひ返され無念にあらん。但し、さもなかりしか」

『はつ』と義経袖かき合はせ

「親(おや)兄(あに)の礼(れい)を重(おも)んずれば、無念(むねん)なとも存(ぞん)ぜず」

「ヤアその詞(ことば)虚言(うそ)々々。親兄の礼を重んずる者が、平家の首の内、新中納言知盛、三位中将維盛、能登守教経、この三人の首は鷹首。なぜ偽つて渡したぞ。まづこの通りの御立腹、さあ御返答は」

と尋ねれば

「ホ、その言ひ訳いと易し。鷹首を以て真(まこと)とし、真を以て鷹とするは軍慮の奥義。平家は二十四年の栄華、滅び失せても旧臣陪臣国々へ分散し、赤旗の翻(ほん)翻(ほん)する時を待つ。一門の中にも、三位中将維盛は小松の嫡子で平家の嫡流。殊に親重盛、仁を以て人をなづけ厚恩の者、その数知らず。維盛ながらへありと知らば、残党再び取り立つるは治定(しじょう)。まつた新中納言知盛、能登守教経は古今独歩のえせ者。大将の器量ありと招きに従ひ、馳せ集まる者多からん。さすれば天下

「君鎌倉を滅ぼさんと院宣(いんせん)を乞ひ給ひしに、初音の鼓を以て裏皮は義経、表は頼朝打てと言ふ声あるとて頂戴ありしと、左大臣朝方公より急の知らせ」

と聞いて義経

「さては、朝方が讒言(ざんげん)せしな。その鼓の事は某かねての懇望、下し置かるゝ場になつて叛逆に寄せたる詞の品。これ朝方の計らひとは思へども、院中より下さるゝ恩物、請け納めずば勅命に背く、受けては兄頼朝へ孝心立たずと、望みに望みし鼓なれども、あれ、あの如く床に飾りて眺むるばかり。神明仏陀(しんめいぶつだ)も照覧(しょうらん)あれ。打ちもせず、手にも触れず」

と仰せに

川越

「ハツ、ハツ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

三拝し

「その御誓言の上、何疑ひ奉らん。二つの仰せ分かれ、さつぱり明白。さりながら、情けなきは今一つ、御簾(ごれん)中卿(ちゆうけい)之君は平大納言時忠の娘、平家に御縁組ま

れし心はいかに」

「ヤア愚かな尋ね。兄頼朝の御台政子は北条時政が娘、その時政は平家にあらずや」

「イヤ、それは主君頼朝伊豆の伊東に御座ある時、北条一家を味方に付けん計略の御縁組」

「ヤア言ふなく。もと卿之君は汝が娘、平大納言へ貰はれ育てたは時忠。肉身血を分けた親はその方、何故それ程の事、鎌倉にて言ひ訳せざるや。但し義経と縁あると思はれては、身の瑕瑾かきんと思ひ隠し包んだか。

卑怯至極」

と仰せを

聞くより川越太郎、居たる所をどつかと居直り

「ヤアお情けない義経公。清和天皇の末流九郎義経を婿に持つたは、恐らく日本の舅頭しゅうとうがしら。五十に余る川越が、名を惜しんで禄を貪むさぼらうや。今因縁を明かせばごなたの言ひ訳するも暗く、縁者の証拠しやうことなる故に、ム、鎌倉では隠し包んだ。陰になり日向ひなたになり言ひくろむれども、御前には讒者の舌は強くなり、今に

義経間近く立ち寄り給ひ

「かくあらんと思ひし故、わざと川越が血筋を頭はし、平家の縁を除かんと、思ひし甲斐もなき最期。浅まし身の果、よしなき契りを交はせし」

と御目に余る涙の色

静御前も諸共に、あなたごなたを思ひやり、泣き沈み給ふにぞ

手負ひは君を恋しげに

「一つならず二つまで大切な言ひ訳立ち、残る一つは平家と縁組。その科私が皆なす業わざ、恋ひ慕ふ身をお見捨てなう、これまではいかいお情。世につれないとはかないは、明日あすを定めぬ人の命、短うお別れ申します。静殿、わが君様を大切に、頼むぞやいの」

とせき上げて、『わつ』とばかりに泣きけるが

「サ、サア川越殿。平大納言時忠が娘の首、頼朝様へ御目につけ、御兄弟の御和睦、それが冥途へよい土産」

と首さし延ばす心根を

なつて川越が娘と言ふて得心あらうか。卑怯至極と思し召す御心根も面目なし。臍腹一つが御土産」

と差添へ手早に抜き放す

「ノウこれ待つて」

と卿之君、駆け出でて手に縋り

「その言ひ訳はみづから」

と刃物もぎ取りわが喉へ、ぐつと突き立てどうど伏す

『これは』と驚く義経公

静も駆け出で抱き起こし

「薬よ、水よ」

と狼狽うろたへて、涙より他詞なし

川越は見向きもせず

「出かされた時忠の娘、そうなうては御兄弟御和睦の願ひも叶はず。疾くに呼び出しわが手にかげんと思ひしが、われと最期を遂げさして死後に貞女と言はせたく、わざと自滅と見せかけし、よう拔身を奪むすひ取つた。ハア天晴あめばれ健気な女中や」

と余所に誉むるも心は涙

思ひやる程川越太郎、胸に満ちくる涙をば、呑み込みく側わきに立ち寄り

「ホ、出かされた、天晴れく。あかの他人の某が、

介錯して進ぜう」

と刀するりと抜き放す

「ノウコレ、そのあかの他人の御手を借かるも、深き御縁。とてもものに、たつた一言」

「親子の名乗りは、未来でせう。さらば、さらば」

「おさらば」

『さらば』と、討つ首よりも体は先へ川越が、どうど座してぞ萎れある心ぞ思ひ遣られたり

静御前も

義経も、歎きに沈み給ふ折から

耳を突き抜く鐘太鼓、関とをどつとぞ上げにける

「コハいかに」

と静は仰天
君も驚き

「さては、海野土佐坊めが攻めかけしと覺えたり。亀

井、駿河」

と仰せの内より

押取り刀で兩人が、表をさして駆け出づるを

「ヤレ待たれよ」

と太郎は呼び止め

「仰せ分けを聞くまではと留め置きしを攻めかけた

は、彼らも讒者と一味の輩。とはいへ兩人鎌倉殿の

名代、過ちあつては敵対するも同然、只すみやかに

追返すか、おどしの遠矢で防がれよ。さないとたちま

ち義経の仇」

と言ひ含むれば

兩人は

「もつとも道理」

と呑み込んで、表をさしてかけり行く

義経公も『川越が詞至極』となほも氣を付け

「無分別の弁慶が心許なし、武蔵々々」

と呼び給へば

腰元立ち出で

「武蔵殿は最前より打ち萎れぬられしが、鬨の声を聞くとはや、悦び勇んで行かれし」

と聞くより

「こいつ事仕出ださん、静参つて急ぎ制せよ。矢先危

ふし、ソレ鎧」

『はつ』と腰元持ち出づる

その間に長押の長刀かい込み、表へ走る女武者、堀川夜

討に静が働き、末世に言ふもこれならん

いかゞと案じ給ふところへ

亀井

駿河、駆け戻り

「我々味方を制して矢を射させ、追帰さんと存ぜし

ところ、武蔵坊の無法者、玄翁掛け矢を以て敵をみし

やぎ、大鋸にて人を引斬り、討手の大将海野の太郎

を、てつべいから爪先まで叩き砕いて候」

と申し上ぐれば

大将呆れ

川越太郎は『ハツ』とばかり

「チエ、しなしたり、ひろいだり。討手の大将討ち取

つては御兄弟和睦の願ひも叶はず。不憫や娘も詮なき

犬死、是非もなき世のありさま」

と悔やみ涙に

義経公

「古人は人を恨みず、傾く連のなす業と、思へば恨み

も悔ひもなし。武蔵が不骨を幸ひに、われ都を開かば

勅命も背かず、兄頼朝の怒りも休まる。これを思へば

卿之君が最期、残り多や」

と御涙

「皆夢の世の有為転変、われも浮世に捨てられて、駅

路の鈴の音聞かん。亀井駿河供せよ」

と立ち出で給へば

川越太郎、萎れながら『暫し』と止め、床に飾りし鼓携

へ

「君、多年御懇望ありし重宝、残し置かれては取り落

とされしと申すも残念。院勅に打つといふ声ありと

は、皮より穢れし讒者の詞。打つを拙者が調べ換へ、

再び御連枝具合の取り持ち、長路の旅の御物忘れ」

と心を込めて差し出だす

義経御手に触れ給ひ

「親しき兄弟の因をば、打ち切らるゝも連の尽き。

結び返せよ、川越」

と駿河亀井を御供にて、すこく館を出で給ふ、御心

根のいたはしさ

見送る人も鎌倉へ、是非なくくも立ち帰る、世の成り

行きぞ、是非もなき

後は貝鉦関の声、震動するも理や

武蔵坊弁慶が海野太郎を討ち取つて、『つひでに土佐坊

せしめてくれん』と、追つかけ廻つて正尊が乗つたる馬

の尻尾に乗り、ぼつ立て蹴立て白洲の庭、館もゆるぐ撞

鐘声

「ヤアくわが君やおはする。討手に向ひし海野は粉

にして土佐坊めを生け捕つたり。亀井駿河はいづくに

居る、武蔵が料理の喰ひ残し、賞翫せぬか」

と呼ばはつても

館はひつそと静まつて、答ゆる人もなき不思議

「不思議、不思議」

と見廻す内

坂東一の土佐坊が腰の上帯引き切つて、馬より飛び下り
大声上げ

「者共来たれ」

と下知の内

兵具の兵数百人

「ソレ、討ち取れ」

と押取り巻く

武蔵も馬より一足飛び、太刀も刀も驚掴み、熊鷹掴みの
首の骨、握ると切れる数万力、雨か霰か人礫

隙間を見て土佐坊が、武蔵が弱腰しつかと抱く

「シヤ、小僧めが味をやる、腰の療治で捻るか揉む

か、さすつておけるの」

ぶりくぐどさり、尻餅ついてもひるまぬ曲者、四尺に

余る大刀者、討つてかゝれば

ひらりとほづし

丁ど切れば

柄先でしやんと受け止め

「ム、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、出かすく。腰をさすつた

その代はり、首筋捻つてくれんず」

とほつしとはねて身をかはし、大太刀蹴落とし素首掴

み、ぐつと引き寄せ、腰に引付け

「わが君様、御台様、亀井やあい、駿河やあい」

と引きずり廻り呼び廻り、尋ね廻れど人々の御行方も見

えざれば

「さてはこの家を落ち給ふか、こはなに故」

と身の科と思ひ寄せば

言ふ人も、答ゆる人も梢の鳥

泣いて詫びする土佐坊を、右を左へ持ち直し

「自体こいつが逃げ廻り、隙取つた故お供に遅れた。

おのが首の飛ぶ方がわが君様の御行方、よい投げ

算」

と引掴み、ちよつぺい頭を頭巾越し、すぼりと抜いて空

へ投げ

「こけたる方は巽の間、菟原小原の方でもあるま

い、もとは牛若丑の方。巳午もよしや吉野も気づか

ひ、こゝに戌亥や酉ならで、程はあるまい追付かん」

と忠義と思ひせし事も、今になつては未申、思ひ違ひ

の荒者が、あら砂蹴立つる響はどろくどろくくく

踏みしめく踏みならし、義経の跡を寅の刻、風を起こ

して追ふて行く

二段目

伏見稻荷の段

追ふて行く

吹く風につれて聞こゆる鬨の聲、物すきまじき景色かな
昨日は北闕の守護、今日は都を落人の身となり給ふ九郎
義経、数多の武士も散り散りになり

亀井六郎

駿河次郎

主従三人大和路へ、夜深に急ぐ旅の空
跡振り返れば堀川の御所も一時の雲煙、浮世は夢の伏見
道、稻荷の宮居にさしかゝれば

義経の御跡を慕ひ焦がれて静御前、こけつまろびつ来た
りしが、それと見るより縋り付き

「胴慾なわが君」

と暫し涙にむせびしが

「武蔵殿を制せよとわしをやつたその後で、早や御所

思ひがけなき武蔵坊、『はつ』と恐れ入りけるが

「またぞろや御機嫌を損なふたそふなれど、弁慶が身
に取つて不調法せし覚えなし」

「ヤア、覚えなしとは言はれまい。鎌倉殿と義経が兄
弟の不和を取り結ばんと川越が実義、卿之君が最期を
無下に、義経が討手に上りし鎌倉勢をサなせ切つ
た。それでも汝が誤りであるまいか、サア、返答せよ
坊主め」

とはつたとにらんで宣へば

武蔵は返す詞もなく、頭も上げずるたりしが

「憚りながらその事を存せぬにてはあらねども、主君
を狙ふをまじくと見てゐる者のあるべきか。これと
いふもわが君の漂泊より起つたこと、無念々々」

と拳を握り、つひに泣かぬ弁慶が足ない涙をこぼせし

は、忠義故とぞ知られける

義経、面を和らげ給ひ

「わが行く先が敵となつて、一人でもよき郎党を力に
する時節なれば、この度は赦しておく」

をお退きと聞き、二里二里遅れようとも追付くは女の
念力。ようもくむごたらしうこの静を捨て置いて、
二人の衆も聞こえませぬ。わしも一緒に行く様にとり
なし言ふて下さんせ」

と歎けば

共に義経も、情けに弱る御心

見てとつて駿河の次郎

「ホ、主君も道すがら噂なきにはあらねども、行く道
筋も敵の中、女義を同道なされては如何ならん」

とすかしなだむる時しもあれ

武蔵坊弁慶息を切つて馳せ着き

「土佐坊海野を仕まふてのけん、都に残り思はず遅
参つかまつる」

と言ひも敢へぬに

御大将扇を持つて丁々と、なぐり情けも荒法師を、目鼻
も分かず叩き立て

「坊主、びくとも動いて見よ。義経が手討ちにする」
と御怒りの顔色に

と仰せに

弁慶『はつ』とばかりに頭を下げ、坊主頭を撫で廻して
喜べば

「サアこれからはこの静が、君のお供をする様にとり
なし頼む、武蔵殿。いかなる憂き目に逢ふともちつ
とも厭はぬ、厭いはせぬ。連れて行て下さんせ」

と涙ながらわが君にひしびしと抱き付き、離れがたなき
風情なり

静が別れに判官も目をしばたきおはせしが、亀井に持
たせし錦の袋

「それこなたへ」

と取り出だし

「これこそは法皇より下し賜はる初音の鼓。また逢ふ
までの形見とも、思ふて朝夕なぐさめ」

と渡し給へば

鼓をひしと身に添へて、かつぱと伏して泣きぬたる

時刻移ると主従も、涙と共に立ち給へば

静はそのまゝわが君の、御袖に縋り付き

「瀨川へも身を投げて、死ぬるく」
と泣き叫べば

人々も持てあまし、なんとせん方駿河次郎、立ち寄つて
会釈もなく取つて引き退け、『幸ひの縛り縄』と鼓の調
べ引ほどき、静を道の梅の木にがんじがらみに括り付け

「さあ邪魔は払ふたり、いざさせ給へ」
と諸共に、道を早めて急ぎ行く

跡に静は身をもがき、わが君の後影、見ては泣き泣いて
は見

「エ、胴慾な駿河殿、情けにて掛けられた縛り縄が恨
めしい。引けば悲しやお形見の鼓が損ねう何とせう。

解いて死なせて下され」

と声をはかりに泣き叫ぶは、目も当てられぬ次第なり

落ち行く義経逃さじと、土佐が郎党逸見の藤太

数多の雑兵銘々松明腰提灯、道を照らして追かけしが

枯木の蔭に女の泣く声

「何者ならん」

と立ち寄つて

「ヤアこいつこそ音に聞く義経が思ひもの静といふ白
拍子。縄まで掛けてあてがふたは、うましく。この
鼓も義経が重宝せし初音といふ鼓ならん。福徳の三年

目
と藤太手早く縄切り解き、鼓を奪ひ取り引立て行かんと
するところへ

四郎兵衛忠信、君の御跡慕ひ来て、かくと見るより飛
びかゝり、藤太が肩骨引掴み、初音の鼓を奪ひ返し宙に
引提げ二三間、取つて投げ退け静を囲ひ、ふんぢかつて
立つたるは、心地よくこそ見えにけれ

「ヤア忠信殿、よいところへよう見えた」

と喜べば

逸見の藤太

「さては忠信よき敵、からめ捕つて高名せん」

とばらくと迫取り巻く

「ヤア、しをらしいうんざいめら。おのれらが分際で
この鼓を取らんとは、胴より厚き面の皮、打ち碎つて
くれんず」

とぼんくくと踏みのめせば

『ぎやつ』とばかりを最期にて、そのまゝ息は絶え果て
たり

鳥居の元の木蔭より、義経主従駆け出でく

「珍しや忠信」

と仰せを聞くより

『はつ』とばかり

「コハ存じ寄らぬ見参」

と飛びしきつて手を付けば

亀井

駿河

武蔵坊、互ひに無事を語り合ふ

義経公も御悦喜にて

「今にはじめぬ忠信が手柄、天晴れく。今よりわが
姓名を譲り、清和天皇の後胤源の九郎義経と名乗り、
まさかの時は判官になり代はつて敵を欺き、後代に名
をとどめよ。これは当座の褒美」

とて、家来に持たせし御着長、忠信に給ひければ

『はつ』とばかりに押し戴き、頭を土に擦り付けく
「御姓名まで賜はるは生々世々の面目、武士の冥
加に叶ひし」

と喜び涙にくれければ

判官重ねて

「汝は静を同道して都にとゞまり、万事よろしく計ら
く」

と君は静に別れを惜しみ

「さらばく」

と立ち給へば

『今が誠の別れか』と立ち寄る静を

武蔵坊

亀井

駿河、立ち隔て押し隔つれば

忠信も、わが君に暇乞ひ、互ひに無事をうなづき合ひ
歎く静を押し退けく、心強くも主従四人、山崎越えに
尼ヶ崎、大物さして出で給ふ

「これなう暫し待つて給へ」

と行くを

制し、止むれば

御行方を打ち守り

「御容顔を見る様で恋しいわいの」

と地に平伏し、正体もなく泣きければ

「オ、道理々々、さりながら別れも暫しこの鼓、君の形見とあるからは君と思ふて肌身に添へ、憂さを晴らさせ給へや」

と下し賜はる御着長、ゆらりと肩に引担げ、宥め宥めて手を取れば

静は泣くく形見の鼓肌身に添へ、尽きぬ名残にむせかへり、涙と共に道筋をたどりくつて

渡海屋・大物浦の段

行く空の

夜毎日毎の入船に、浜辺賑はふ尼ヶ崎、大物浦に隠れなき渡海屋銀平、海をかへて船商売店は碇帆木綿、上り下りの積荷物、運ぶ船頭水主の者、人絶えのなき船間屋、世をゆるかせに暮しける

夫は積荷の間屋廻り、内を賄ふ女房おりう、宿借り客の料理拵へ、所がらとて網の物塩がらな塩梅も、甘う育ちし一人娘、お安がついの転寝に、風邪ひかさしと裾に物

奥の襖をがらりと明け、風呂敷わいがけ旅の僧、によきくくと立ち出づれば

「オ、これはまあお客僧様、今御膳を出しますにどこへお出でなさるゝぞ」

「さればく、西国への出日和待つて連れ共もほつと

退屈。たゞ居よよりは西町へ往て買物をして来ませう

「これはく残り多い。外のお客へは鳥貝鱠、御出家には精進料理、分だつて拵へたに、つい上がつてござらぬか」

「ア、イヤく、愚僧は山伏なれば精進せぬ。鳥貝鱠よかるぞや」

「それでもお前、今日は二十八日で不動様の御縁日」

「ほんにさうぢや。大事の精進、ハテ何としよ、しよ事がない。往てきませう」

とふいと立つ

「あいた、あいた、あいた」

「ハアお客僧様、何となされた」

「イヤ、別の事でもないが、寝てゐるはこゝのお娘か。この子の上を踏み越えたればにはかに足がすくばつて、エ、聞こえた。小さうても女子なれば、虫が知らしてしやき張つた物である。ヤア大降りのでせぬ内に、往てきませう」

と武蔵坊、ばつてう笠引被り、いづくともなく急ぎ行く母は娘の傍に寄り

「コレお安、その様に転寝して、風邪引いてたもるなや」

と抱き起こせば

目を擦りく

「オ、母様、お前のなさるゝ事見てゐて、ついでとくくと一寝入り」

「オ、それならば目を覚まして、今朝習ふた清書をとつくりとよう書いて、とく様のお目にかきや」

と子には目のなき親心、手を引き納戸へ入りにけるかゝる所へ誰とも知らぬ鎌倉武士、家来引き具し

「亭主に逢はう」

と内に入れば

女房驚き走り出で

「夫は他行、何の御用」

と尋ねれば

「身は北条が家来相模五郎といふ者。この度義経尾形

を頼み、九州へ逃げ下るとの風聞によつて、鎌倉殿の仰せを受け、主人時政の名代として、討手に只今下れども、打ち続く雨風にて船一艘も調はず。幸ひこの家に借り置いたる船、日和次第出船と聞く。願ふ所なれば、その船身共が借り請け艫を押し切つて下らんとす。旅人あらばいまくり座敷を明けて休息させい。早うく」

と權威を見せての上がれば

女房は『はつ』と返答に、当惑しながら傍に寄り

「御大切な御用に船がなうてさぞ御難儀。手前のお客も二三日以前より日和待ちして御逗留。今更船を断り言ふて、お前の御用にも立て難し。殊に先様も武士方なれば、御同船とも申されず。何とぞ御了簡あつて、今夜の所をお待ちなされて下さらば、その内には日和も直り何艘もく入船の内を借り調べて上げませう」
「黙れ女。逗留がなればおのれらには言ひ付けぬ。所の守護へ権付けに言ひ付ける。奥の侍が怖うておのれらが口から言ひにくくば、身どもがじきに言ふべい」

家来なるが義経の討手を蒙り、奥の武士が借つたる船、この方へ借らんとため奥へ踏み込み身がじきにその武士に逢はうと言へば、わが女房が遮つてとむる故に今この仕儀」

「へエ、憚りながらそりやお前が御無理な様に存せられます。何故と仰りませ。人の借つて置いた船を無理に借らうと仰りますは、ナア御無理ぢやござりませぬか。その上にまだ宿借りの座敷へ踏込もうとなされたをやらんと仰つて、女房共を踏んだり蹴たりなさるゝは、お侍様にはへ、似合ひませぬ様に存じます。この家に一夜でも宿致しますれば商ひ旦那様、座敷の内へ踏込ましては、どうも私がお客人へ立ちませぬ。どうぞ御了簡なされて、お帰りなされて下さりませ」

「イヤ素町人め、鎌倉武士に向つて帰れとは推参。是非奥へ踏み込む」

と反り打ち返して犇めけば

「ア、お侍様、それはお前の御短気でござりましょ。私も船問屋はしてゐますれど、聞きはつゝてをります

とずんと立つ

袂に縫り

「お急きなされるは御尤もなれども、お前を奥へやりましてじきに御相對さしましては船宿の難儀。何分夫の帰らるゝまで、お待ちなされて下され」
と手をすり詫ふれど

「ヤアしちくどい女房め。奥の武士に逢はさぬは察する所平家の余類か、義経の所縁の者。家来ぬかるな油断すな」

ととむる女房を

刎ね退け突き退け

また取り付くを

あられなく踏み倒し蹴倒すを

戻りかゝつて見る夫、走り入つてかの侍が手を取つて

「真平御免下さるべし。すなはち私この家の亭主渡海屋銀平。御立腹の様子、我等に仰せ下さるべし」

と膝を折り手を付けば

「ムウ、おのれ亭主なら言つて聞かさん。身は北条の

が、惣別刀脇差では人切るものぢやないげにござります。お侍様方の二腰は身の要害。人の粗忽狼藉を防ぐ道具ちやとやら承はりました。さるによつて、武士の武の字は戈を止むるとやら書きますげにござります」

「ヤアこしやくな奴め。嘲る類桁切り裂かん」

と抜き打ちに切り付ける

ひつ外して相模が利き腕むんと取り

「コリヤもう了簡がならぬわい。町人の家は武士の城廓。敷居の内へ泥脛を切り込むさへあるに、この刀で誰を切る。その上に平家の余類の、イヤ義経の由縁なんどと旅人を威すのか。よしまた判官殿にもせよ、大物に隠れなき真綱の銀平がお匿ひ申したら何とする。サア真綱が控へた、ならばびくとも動いて見よ。素

頭微塵にはしらかし命を取楯。この世の出船」

と刀もぎ取り宙に引提げ持つて出で、門の敷居にもんどり打たせば

死に入るばかりの痛みをこらへ、面をしかめて起き上がり

「亭主め、よつく覚えてあよ。この返報にはうぬが首、さらへ落とす覚悟せよ」

「ヤアまだ頼桁叩くか」

と庭なる碇をぐつとさし上げ、微塵になさんと振り上ぐれば

暴風に合ふたる小船の如く、尻に帆かけて主従は跡を見ずして逃げ失せける

「ホ、よいさまく」

と煙草盆引き寄せ

「何と女房、奥のお客人も今のもやくや、お聞きなき

つたであらうな」

と女夫がひそめく話声

曳れ聞こえてや、一間の襖押し開き義経公、旅の艱苦にやつれ果てたる御顔

駿河

亀井も跡に従ひ立ち出づる

「こは存じ寄りなや」

と夫もにはかに膝立て直し

夫婦諸共手を下ぐれば

「隠すより頭はるゝはなしと兄頼朝の不興を受け世を忍ぶ義経。尾形を頼み下らんとこの所に一宿せしに、

その方よくも量り知つて時政が家来を追ひ退け今の難儀を救ふたるは、業に似合はぬうい働き。我れ一の

谷を攻めし時、鷲尾といへる木樵の童に山道の案内させしに、山樵には剛なる者故武士となして召し使ひ

しが、それに優つた汝が働き。天晴れ昔の義経なら

ば、武士に引き上げ召し使はんに、あるに甲斐なき

漂泊の身」

と武勇烈しき大将の、身を悔やみたる御詞

駿河

亀井も諸共に、無念の拳を握りける

「これはく、ありがたい御仰せ。私もこの界限では真綱の銀平とて人に知られてゐますれど高が町人。今日

の働きも畢竟申さば寵將軍。些細な事が御目にとまつて、我々連れに御褒美の御詞、冥加に余る仕合は

せ。殊に君を見覚え奉るは八嶋へ赴き給ふ時、渡辺福

義経公

「船中の事は銀平が直しく計らひ得させよ」

と仰せに

『はつ』と頭を下げ

「只今も申す通り、幼少より船の事はよく鍛錬仕れ

ば、御見送りのため拙者も手船で、須磨明石の辺まで

参らん。元船の有所は五町余り沖の方、船は則ち日吉

丸、思ひ立つ日が吉日吉祥。我れも雨具の用意を致

し、跡より追付き奉らん。女房、君を御見立て申せ」

と言ひ捨て納戸に入りければ

妻は心得御身をば隠れ蓑笠参らする

「オ、心遣ひ忘れじ」

と亀井

駿河諸共に、蓑笠取つて着せ参らせ、二人も手早く紐引

き締め

「いざさせ給へ」

と主従三人、打ち連れ立つて浜辺に出で、兼ねて用意の舟に召し給へば

にて見置いた」

と見透す様に言ひけるは、その道々と知られける

亀井六郎ずんど立ち

「オ、銀平出かしたり。その方が詞に付いて、雨の晴間に片時も早く、主君の御供仕らん」

と申し上ぐれば

兩人も飛び乗りく

「サアく船頭仕れ」

ともやひ解けば

女房は、門送りして船場に降り

「御武運めでたくましくく、御縁もあらば重ねて御目にかゝるべし。さらば、さらば」

に艦を押し立て、沖へ出で船

女房は、いきせき

内へ入相時

「ア、心せかれや」

と火燈ならして油さし、神棚お上に灯を照らし

「娘、娘、お安、お安」

と呼び出だし

「暮方に手習ひもおきやらいで、今夜はとゞ様侍衆を元船まで送つてなれば、そなたも寝るまでこゝにあや。ほんに主とした事が、千里万里も行く様に身拵へ。もう日も暮れた、用意がよくば行かしやんせ」

と呼べど

ぐつとも答へなし

「もし昼の草臥れで転寝ではあるまいか。銀平殿、

銀平殿」

と呼び立つれば

「そもくこれは、桓武天皇九代の後胤平知盛幽霊なり。渡海屋銀平とは仮の名、新中納言知盛と実名を頭はす上は、恐れあり」

と娘の手を取り上座に移し奉り

「君は正しく八十一代の帝安徳天皇にて渡らせ給へど、源氏に世をせばめられ所詮勝つべき軍ならねば、玉体は二位の尼抱き奉り、知盛諸共海底に沈みしと欺き、某供奉してこの年月、お乳の人を女房と言ひ一天の君をわが子と呼び、時節を待ちし甲斐あつて、九郎太夫義経を今宵の内に討取り、年来の本望を達せんは、ハ、ア悦ばしや嬉しやな。典侍局も悦ばれよ」と勇める顔色威あつて猛く、平家の大将知盛とはその骨柄に頭はれし

と勅

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ありがたし」

と竜顔を押し申せば

おとなしき

八つの太鼓も御年の数を象る合図の知らせ

「早や御暇」

夕浪にくく長刀取り直し、巴波の紋辺りを払ひ、砂を蹴立て早風につれて眼を眩まし

飛ぶが如くに

かけり行く

跡見送つて典侍局、御傍に差し寄つて

「今知盛の仰つたをようお聞きなされたか。稚なけれども十善の君、このさもしき御姿にては軍神への恐れあり。御装束」

と立ち上がり、まさかの時は諸共に冥途の旅の死装束と、心に込めし納戸口、涙隠して入りにける

夜も早や次第に更け渡り、雨風激しく聞こゆれば

「さては常々の御願ひ、今宵と思し立ち給ふな。わきて九郎はすゞどき男、仕損じばし給ふな」

「ム、ム、ムウそれにこそ術あり。北条が家来相模五郎といつしはわが手下の船頭共。討手と偽り狼籍させ、某義経に方人の体を見せ心を赦させ、今夜の難風を日和と偽り船中にて討取る術なれども、知盛こそ生き残つて義経を討たんなりと、沙汰あつては末々君を御養育もならず、重ねて頼朝に仇も報はれず。さるによつて、某人数を手配り。解にて後よりぼつ付き、義経と海上にて戦は、西海にて亡びたる平家の悪霊知盛が怨霊なりと雨風を幸ひに、彼等が眼を眩ましせん為、わが形もこの如く怪しく見する白糸緘、この白柄の長刀にて九郎が首取り立ち帰らん。勝負の合図は大物の沖にあたつて提灯松明一度に消えなば知盛が討死と心得、君にも御覚悟させまし、御骸見苦しなき様に」

「才、跡気遣はずとよき奏を知らせてたべ」

「知盛早う」

「今頃は知盛の難儀しやらん、いとほしや」

とねびさせ給へばひたすらに、案じ侘びたる御気色程なく局は山鳩色の御衣冠、うやくしく台に乗せ、その身も共に衣服を改め一間を出で

「片時も早く御装束」

と御傍に立ち寄り、賤の上着を脱ぎ替へて、下の衣上の衣、御衣冠に至るまで召さし替ゆれば

あてやかに、始めの御姿引きかへて、神の御末の御粧ひ、いと尊くも見え給ふ

「サアこれからは知盛の吉左右を待つばかり」

とそよとの音も知らせかと、胸とごろかす太鼓鐘

すはや軍真最中と君のお傍に引添ふて、知らせを今やと待つ折から

知盛の郎党相模五郎、息つぎあへず馳せ付けば

「様子はいかに。早う聞かせよ」

と局も急にせき立つたり

「されば兼ねて術の通り、暮れ過ぎより味方の小船を乗り出だしく、義経が乗つたる元船間近く漕ぎ寄

せしに、折しも烈しき武庫山嵐に連れて降りくる雨

雷、時こそ来たれと水練得たる味方の勢、皆海中に飛び込みく、『西国にて滅びし平家の一門、義経に

恨みをなさん』と声々に呼ばはれば、敵に用意やしたりけん、提灯松明ばらくと味方の船に乗り移り、

こゝをせんとと戦へば、味方の駆武者大半討たれ事危うく見え候ふ。某は取つてかへし、主君知盛の御先

途を見届けん」

と申すもあへず駆けり行く

「サアく、大事が起こつて来た。さるにても知盛の御身の上気遣はし。沖の様子はいかならん」

と一間の戸障子押し明くれば

提灯松明星の如く、天を焦がせばまんくたる海も一目に見え渡り、数多の小船やり違へく、船矢倉を小だ

てに取り敵も味方も入り乱れ、船を飛び越え刃ね越えて、追つまくつゝえいゝ声にて切り結ぶ、人影迄も

ありくくと戦ふ声々風につれ、手に取る様に聞こゆるにぞ

局は歎きの内よりも、君を膝に抱だき上げ、御顔つくづくと打ち守り

「二年余りはこの見苦しきあばらやを、玉の台と思し召しての御住居。朝夕の供御までも、下々と同じ様に

にさもしいもの。それさへ君の心では殿上にての栄花とも、思ふてお暮しなされしに、知盛お果てなされ

ては賤が伏屋に御身一つ、置き奉る事さへもならぬ様に成り果て、つひにはこの浦の土となり給ふかや。

上もなき御身の上に、悲しい事の数々が続けば続いてものかいの」

と口説き立て口説き立て、身もうくばかり歎きしが

「ア、よしなき悔み事、御覚悟急がん」

と涙ながら御手を取りなくく

『いと尋常なる御姿、この海に沈めんか』と思へば目もくれれ心もくれ、身もわななくとぞ震ひける

君は賢しくませど、死ぬる事とはつゆ知り給はず

「これノウ乳母、覚悟々々と言ふていづくへ連れて行くのぢやや」

「あれく御覽ぜ、あの中に知盛のおはすらん」

と延び上がり、見給ふ内に提灯松明次第々に消え失せて、沖もひとつそとじづまれば

『これこそ知盛の討死の合図か』と余り呆れて泣かれもせず、途方に暮れて立つたる所に

入江丹藏朱になつて立ち帰り

「義経主従手いたく働き、味方残らず討死。まつた主君知盛も大勢に取り巻かれ既に危うく見えけるが、か

いくれに御行方知れず。必定海に飛び込んで御最期と存ずれば、冥途の御供仕らん」

と言ひもあへず諸肌くつるげ持つたる刀腹に突き立て、

汐の深みへ飛び込めば

「ヤアさては知盛もあへなく討たれ給ひしか」

『はつ』とばかりにどうど伏し、前後も知らず泣きければ

君も見る事聞く事の悲しき怖さ取り交せて、共に涙に暮れ給ふ

「オ、さう思し召すは理り、コレようお聞き遊ばせや。この日の本にはな、源氏の武士はびこりて恐ろしい国。この波の下にこそ、極楽浄土といふて結構な都がござります。その都にはな、祖母君二位の尼御を始め、平家の一門知盛もおはすれば君もそこへ御幸あつて、もの憂き世界の苦しみを、免がれさせ給へや」となだめ申せば

打ち萎れ給ひ

「あの恐ろしい波の下へ只一人行くのかや」

「ア、勿体ない。このお乳が美しう育て上げたる玉体を、あのなんくたる千尋の底へやりまして、何と身も世もあられうぞ。このお乳もお供する。いとし可愛の育ひ君、何とお一人やられうぞ」

「それなら嬉しい。そなたさへ行きやるならば、いくへなりとも行くわいの」

「オ、よう言ふて給はつた」

【と引き寄せ引き寄せ、抱きしめ

「火に入り水に溺るゝも前の世の約束なれば、未来の

誓ひましまして、天照らす太神へ御暇乞ひ」と東に向はせ参らすれば

美しき御手を合はせ、伏し拝み給ふ御有様

見奉れば気も消えく

「オ、ようお暇乞ひなされたなう。仏の御国はこなたぞ」

と指指す方に向はせ給ひ】

「今ぞ知る、御裳灌川の流れには、波の底にも都あり

とは」

と詠じ給へば

「オ、お出かしなされた、ようお詠み遊ばした。その昔月花の御遊の折から、かやうに歌を詠み給はゞ、父帝は申すに及ばず祖父清盛公二位の尼君、取り分けて母門院様、何ぼう悦び給はん、今際の際にこれがマア言ふに甲斐なき御製や」

とかき口説きく、涙の限り声限り歎き口説くぞ道理なる

局は涙の隙よりも、御髪かき上げかき撫でて

とよるぼひく、駆け回れば

一間を踏み明け九郎判官、帝を弓手の小脇にひん抱き、局を引き付け突立ち給へば

「あら珍しや、いかに義経。思ひぞ出づる浦浪に、知盛が沈みしその有様に、また義経も微塵になさん」と長刀取り直し

「サア、サア、サ、サ、勝負々々」と詰め寄れば

弁慶押し隔て

「打物わざにて叶ふまじ」

と数珠さらく、と押し揉んで

「いかに知盛、かくあらんと期したる故、我れも今朝より船手に回り計略の裏をかいたれば、もはや悪念発起せよ」

と持つたるいらだか知盛の首にひらりと投げかくれば

「ム、さてはこの数珠かけたのは知盛に出家とな。

エ、けがらはしく。そもく四姓始まつて、討つては討たれ討たれて討つは源平の習ひ、生きかはり死に

「今は早や極楽への御門出を急がん」

と帝をしつかと抱き上げて、磯打つ波に裳を浸し、海の面を見渡しく

「いかに八大竜王恒河の鱗、安徳帝の御幸なるぞや。守護し給へ」

とうづまく波に飛び入らんとする所に

いつの間にかは九郎義経、駆け寄つて抱き留め給へば

「ノウ悲しや。見赦して死なせてたべ」

とふり返つて

「ヤアこなたは」

「声立てな」

と帝を小脇に引抱へ、局の小腕ぐつと捻ぢ上げ、無理無体に引立てく一間の

「天皇はいづくにまします。お乳の人、典侍の局」

と呼ばはり呼ばはりどうど伏し

「無念、口惜しや。これ程の手に弱りはせじ」

と長刀杖に立ち上がり

「お乳の人、わが君」

かはり、恨みをなきて置くべきか」

と思ひ込んだる無念の顔色、眼血ばしり髪逆立ちこの世からなる悪霊の相を頭はずばかりなり

御幼稚なれども天皇は始終のわかちを聞こし召し、知盛に向はせ給ひ

「朕を供奉し永々の介抱はそちが情け。今日またまろを助けしは義経が情けなれば、仇に思ふな知盛」

と勿体なくも御涙を浮かめ給へば

典侍の局、共に涙にくれながら

「才、よう仰つた。いつまでも義経の志、必ず忘れ

給ふなや。源氏は平家の仇敵と、後々までもこのお乳が帝様に徒し心も付けうかと人々に疑はれん。さあれば生きてお為にならぬ。君の御事くれぐれも頼み置く

は義経殿」

と用意の懐剣咽に突き立て、名残り惜しげに御顔を打ち守りく、『やうば』とばかりをこの世の暇、あへなく息は絶えにける

思ひ設けぬ局が最期

君は猶更

知盛も、重なる憂き目に勇氣も砕け、しばし詞もなかりしが

天皇の御座近く涙をはらくと流し

「果報はいみじく一天の主と産れ給へども、西海の

波に漂ひ海に臨めども潮にて、水に渴せしはこれ餓鬼道。ある時は風波に逢ひ、御召しの船を荒磯に吹き

上げられ、今も命を失はんかと多くの官女が泣き叫ぶは阿鼻叫喚。陸に源平戦ふは、取りも直さず修羅道

の苦しみ。又は源氏の陣所々に数多駒の嘶くは畜生道。今賤しき御身となり人間の憂き艱難目前に六道

の苦しみを受け給ふ。これといふも父清盛、外戚の望みあるによつて、姫宮を御男といひふらし權威を以

て御位につけ天道を欺き、天照大神に偽り申せしその悪逆、積もり積もりて一門我が子の身に報ふたか、

是非もなや。我れかく深手を負ふたればながらへ果てぬこの知盛、只今この海に沈んで末代に名を残さん。

大物の沖にて判官に仇をなせしは知盛が怨霊なりと伝

へよや。サア息のあるその内に、片時も早く帝の供奉を頼むく」

とよろぼひ立てば

「才、我れはこれより九州の尾形方へ赴くなり。帝の御身は義経がいつくまでも供奉せん」

と御手を取つて出で給へば

亀井

駿河

武蔵坊、御跡に引添ふたり

知盛莞爾と打ち笑みて

「昨日の仇は今日の味方、あら心安や嬉しやな。これぞこの世の暇乞ひ」

と振り返つて竜顔を見奉るも目に涙

今際の名残りに天皇も見返り給ふ別れの門出

と、まるこなたは冥途の出船

『三途の海の瀬踏みせん』と碇を取つて頭にかづき

「やうば、さうば」

も声ばかり、渦巻く波に飛び入つてあへなく消えたる

三段目

椎しいの木の段

三芳野は丹後武蔵に大和路や、わけて名高き金峰山
蔵王みろ彌勒りやくの御宝物、御開帳とて野も山も賑はふ道の傍
らに、茶店ちやみせ構へて出花でばな汲む、青前垂まへすだれの入端いれはなは女房盛りの
器量よし、五つか六つの男の子、側に付き添ひ

「かゝ様」

と言ふで端香はながもさめにけれ

枯れ残る身はいとどなほ枝折りや、若葉の内侍

若君は

主馬しゅまの小金吾武里が、嗟峨を遁れて維盛の、『もしや高
野』と心ざし、旅の用意の小風呂敷、背せなに忍海おしうみ吉野な
る、下市村に着きけるが

若君六代わかしう疝疾かんじつに悩み給へば、幸ひの茶店

「暫く床几へお休み」

と内侍を誘ひ、その身も背負ひし包みを下ろし

「お茶」

と指図さしずに

「あいく」

と愛想こぼれて差し出だす

内侍はつくづく見給ひ

「こりやあなたも子持ちよの。自らも連れ合ひの忘れ
篋がたみを伴ひしに、道より悩みて貯へし薬を残らず飲み
切らし俄かの難儀。子持つた者は相身あひみ互たがひ、嗜みあら
ば所望したし」

と仰せに

女房

「それはまあいかい御難儀。私が子は生まれてより腹
痛いた一つ起こしませねば、何の用意もござりませぬ」

「ハテそれは気の毒や」

「イヤ申し、ほんにそれく、幸ひこの村の寺の門前
に洞呂川どうろがわの陀羅助だらかすけを請け売る人がござりますれば、お
供の前髪さん、つひ一走り」

「ア、イヤく身どもは当所不案内。大儀ながらその
方、調べてくれまいか」

「オ、それもお易い事、私が調べて来て上げませう。

コレ善太、留守しや。たゞしは行くか」

「俺も」

と慕ふ子連れて、器量よければ心まで、尊い寺の門前
へ、薬を買ひに急ぎ行く

「ハテ心よい女中や」

と内侍は見やり

「コレ六代、こゝに大分木の実がある。が拾うて遊ぶ
気はないか。金吾が拾ふが大事だいじないか」

と諫めの詞に
引き立てられ

「俺も拾ひろを」

と若君の、病ひもわやく半分の起き立ち給へば
内侍も共々

「サアく拾ひろを」

「イヤ拙者ちつしやめが」

と小金吾が、廿はたちに近い大前髪おとなげないも若君の、
機嫌取るかや柄えらの実を拾ひ

集むる折からに

若き男の草臥くたばれ足、これも旅立つ風呂敷包み、背負うて
ぶらく茶店を見付け

「どりや休んで一服」

と包みをどつかり床几に下ろし

「ヤ、御免なませ。火を一つ」

と煙草吸ひ付け

「こりや皆様方は開帳参りでござりますか。わこ様は
道草みちくさか。わしらが在所の子供と違ひ、テモマア御綺麗
な生まれ付きや」

と誉めても話しかけても

心置く身はそこく、詞数なく拾ひある

暫く休んでかの男

「ア、コレく、その落ちた木の実みは虫入りで、見か
けがようでも皆ほがら。アレ、木にあるをお取りなさ

れ」

と言ふに

金吾は

「こな男、何を言ふ。二丈余りの高木、駆け上るげめは持たぬ」

「サア、それを心安ふ取り様がござります」

「ソリヤ又どうして」

「さらば鍛錬、お目に掛けう」

と小石拾うて打つ礫、枝に当つてはらくくく

若君悦び悩みも忘れ

「小金吾拾へ」

の御機嫌に

内侍も嬉しく

「オ、よい事してもらやつた。過分々々」

と一礼も

冥加に余ると知らざりし、旅の男は自慢顔

「何と手の内御覧じたか。まさつと打つて進ぜたいが、遠道かへお伽申してもゐられず。我等は参る」

と包みを背負ひ

「御縁あらば重ねて」

と言ふてその場を行き過ぎる

小金吾木の実を拾ひしまひ

「サア、これで堪忍なされ。テサテ今の男は機転者」

と見やる床几の風呂敷包み、『同じ色』でもどこやらが、違つたやうな』と走り寄り、内改むれば覚えなき、しかもこれは張皮籠、こちは衣類の藤行李

「さては木の気に氣を奪はせ、取替へ失せたか但しは鹿相か。何にもせよ追つかけて取り返さん」

と駆け出す所へ

向ふより、あたふた戻る以前の男

「ア、鹿相致した、御免々々」

と言ひつゝ包み差し出だし

「日暮れも近し心は急ぐ、同じ色の風呂敷故、重い輕いに氣も付かず、取り違へた鹿相。道にてふつと心付き、取つて返してお詫び言、真平御免下され」

と顔に似合はぬ手すりたいたいぼう

小金吾は胸落ち付き

「鹿相とあれば言ひ分もをりない。が万一紛失の物あると赦さぬが合点か」

「ム、何がさて相違あらば台座の別れ。御存分になされませ」

「ムウ、その一言なら疑ふに及ばねども、中改めて受け取らん」

と包みを開き、改め見れば

「ム、相違もなし。実に鹿相に極まつた。申し分なし。その方の荷物も持つておいきやれ」

と床几に残る風呂敷包み、渡せば

受け取り、不思議顔

「この中ぐくりの解けたは」

「ア、イヤ、それは最前、変はつた様には思へども、もしやとちよつと見たばかり」

と言ふ間に開く張皮籠、引き散らけて袷の袖、浴衣の間を探し見て、恟り仰天行李打ちふるひ

「こりやどうじや、コリヤないわ、ないわく」

ときよろく目玉

「何が無い、何見えぬ」

と側も氣の毒、目を配れば、

兼ねて工みのいがみの男、腕まくりして

「コレ、前髪殿。この皮籠の中に人に頼まれて高野へ上げる祠堂金甘両入れおいた。コリヤくすねたな、くすねたな。サア出した、出したく出しやいの」

と取つても付かぬ難題に

小金吾むつと反り打ちかけ

「こいつ下郎め。武士に向つて何がなんと、今一言言つて見よ」

と屹相変れど

びくともせず

「ハ、ハ、ハ、ハ、盗人たけだけしいと、その高ゆすり喰はぬ、喰はぬわい。赤鯛を撚りかけ、威してこの場を抜けるのかい。ほううまいそんな事、春永になされ、春永になされ。僅か甘両で、首綱のかゝらぬ内、四の五の言はずと出した、出した」

ともがりがみのねだり者

「モウ堪忍が」

と抜きかけしが、お二方の姿を見てじつとこたへて胸撫でおろし

「ム、ホ、ホ、ホ、ホ。コレサ若い人、そりや其元の覚え違ひ。見らるゝ通り足弱をお供したれば、たとへ何万両落ち散つてあつても、目を掛ける所存はなし。とくとそつちを吟味召され」

「ア、コ、コ、コ、コレ、その足弱連れたが盗みする付目ぢやわい。よもやと思はせしてやるが、当世の流行物、何万両はあらぬ、たつたへ、廿両」

「スリヤどうしても、身が盗んだとな」

「ハテ知れたこつちやわい」

「ム、シテその盗んだ証拠は」

「コ、コ、コ、コレ、この皮籠の中紐なぞ解いた。言やいの、この行李は俺が行李、ありさまの荷物に紛失があると、許さぬと言つたでないか、サ理詰ぢやわいの。サ出しやいの、出しやいの、エ、出しやがれ」

付け上り

「廿両といふ金あたゝまつて置いて、その面何ぢやい。オ、怖わ、オ、怖わくくく、オ、怖わやのハ、ハ、ハ、ハ。コ、コ、この赤鯛で切るか。この目で威すかい。前髪を二筋づつ抜くぞよ。但しもう金はふけらしたか。連れの女郎から詮索」

と弱みへかゝるを

首筋掴んで引き戻し、用意の路銀言ふ程出して睨み付け
「大切なお方をお供した故、衞り取らるゝ廿両、持つて失せい」

と打ち付ければ

衞りの習ひ金見ると、目に仏なく手ばしかく拾ひ集めて耳読み揃え

「テモ恐しいこの金を、那智若衆めにすつての事、ひぢり取らりよと致した」

とへらず口

「そのおとがいを」

と立ち寄る金吾を

とせり詰められて

小金吾も

「もうこれまで」

と抜き放す

内侍は慌て抱き留め

「オ、尤ぢやく、道理ぢやわいなう。ガコレ短気な事をしやつては、わしもこの子も共に難儀。無念にあらうと堪忍して、あの者の言ふ様に了簡付けてやつても。足弱連れたを災難と思ひ、胸を鎮めてたもの」

と涙にくれて宣ふにぞ

血気にはやる小金吾も、見るに忍びず

「ハア、世が代の時でござらうなら、腕も臍もずた

くくに試しても飽き足らぬ奴なれども、何を言ふても

茅の穂にもおぢる身の上。御意の通りに致しまし

よ。へエ、口惜しうござりまする」

とこなたは大事の二方を、お供の身なれば無念をこたへ、奥歯噛む程

内侍は押さへ

「事ない内」

と若君引き連れ、立ち出で給へば

是非もなく、跡に引添ふ小金吾も、無念をこたへ上市の、宿ある方へと急ぎ行く

「ハ、ハ、ハ、ハ、たとへ百度睨まれても、一度が一步に付きやせまい。うまい仕事」

といがみの権太、金懐に押し入れて盆やへ急ぐ

向ふへずつと、茶屋の女房が立ち塞がり

「これ権太殿、こりやどこへ」

「ホ、小仙かい。わりや店明けてどこへ往た」

「わしや旅人のお頼みで、坂本へ薬を買ひに」

「オ、そりやよい手筈。我れがゐたらまた邪魔しやうに、外してゐたでまし」

と言ふ胸ぐらを

取つて引きすゑ

「コレ権太殿、こなたに衞りさす気で外してはゐぬぞや。最前戻りかゝつた所にわつぱさつぱ。差し出たら

街りの正銘頭はれ、どんな事にならうも知れぬと、ア、アレ、あの松影から聞いてみた。エ、こな様はく、恐しい工みする人ぢやなう。姿は産めども心は生まぬと、親御は釣瓶鮎屋の弥助の弥左衛門様といふてこの村で口も利くお方。見限られ勘当同然、御所の町にみた時こそ道も隔たれ、跡の月から同じこの下市に住んでも、嫁か孫かとお近付きにもならぬはの、皆こなさんの心から。いがみの権にきぬきせて、街りの権と言ふぞや。この善太郎は可愛うないか。博奕の元手が入るならば、この子やわしを売つてなりと、重ねてやめて下さんせ。何の因果でその様な、恐しい気にならしやつた」

と取り付き歎けば

「エ、引き裂かれめが。又しても世迷言ばつかり抜かしやがるわい。コリヤヤイ、俺が盗み街りの根元は皆うぬから起つた事」

「ホ、こりや大それた事聞かねばならぬ。そりや又どうして」

い。マア内へ戻つて下され」

と縫れど

聞かず匆ね飛ばすを

「こりややい善太よ、留めてくれ」

と母の教えに

利口者

「と、ノウ内へ、サアござれ」

と手にまとひ付く鳶かづら、子が跡追へば

悪者も小手縛りとてうたてがる、しかも血筋の糸縄で

「エ、きびたが悪い、出直そ」

と鬼でも子には引かざるゝ

「テモマア、つめたいほでぢや」

と手を引いて女房

「どうしてとは覚えがあらう。おりや十五の年元服して、親父の言ひ付けで御所の町へ鮎商ひ。隠し女の中におのれが振袖、見込んだが、鯨、鱧程寝入る仏師達の臍くりを盗み出し、店の溜り得意先、身代半分仕廻うてやつた、ナ聞えたかえ。ところで親父がほり出した、ア、無理なわるの。その時因果とこのがきが腹にけつかつて、親方はねだる、年貢米を盗んで立銀、その尻がきて首が飛ぶのを庄屋の阿呆が年賦にして、イヤモ毎日の催促。その金済ませで博奕にかゝり、出世して小ゆすり街り。この中も親父の所の家尻を切つて見たれど、妹のお里めと内の男めが、夜通しの鼻声でとんとまんが損ねた。が又今日のまんのよき、この勢ひに母者の鼻毛をゆすりかけ、二三貫目多じめて来る。酒買うて待つてをれ。コリヤ善太よ、日の暮から寝おんない。夜通しせねばおれが商売は譲られぬ」

と言ひつゝ立てば

女房取り付き

「まだこの上に親御の物までだまし取るとは勿体な

小金吾討死の段

諸共立ち帰る

夕陽西へ入る折から

主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が追手の人数に取り巻かれ、数ヶ所の疵を負ひながら内侍若君御供申し、ひとまづ都へ立ち帰るを

跡に続いて数百人、『遁さぬ、やらぬ』と追駆けたり

「サ、仕了せし、嬉しや」

と思ふ心のたるみにや、『うん』とその身も倒れ伏す

「ノウ悲しや」

と内侍

若君、労はり抱へ抱き起こし

「コレノウ金吾、金吾いなう。気をはつきりと持つてたも。そなたが死んで自らやこの子は何となるものぞ。情けなや、悲しや」

と泣き入り給ふ御声の

耳に通つて、顔ふり上げ

「オ、内侍様、六代様、諦めて下さりませ。心は弥猛に逸れども、もう叶はぬ。コレ申し若君様、今際の際に金吾めが申す事、ようお聞き遊ばせや。わが君維盛様は兼ねて御出家の御望み。熊野浦にて逢ひ奉りし者ある故、高野山へと心ざし御二方をお供したれど、なか／＼この傷では一足も行かれず。お前様は御台様を伴ひ、紙谷の宿といふ所に内侍様を残し置き、人を頼んで山へ登りとゝ様のお名は言はれぬ。今道心の御出家と尋ねてお逢ひ遊ばせ。西も東も敵の中、平家の御公達と悟られぬ様、お命めでたう御成人の後、懼りながら金吾めが事、思し召し出だされなば、一滴の水一枝の花、それが即ち冥途へ御知行。御成長待つてをります。チエ、お名残り惜しい、お別れ」

と言ふもせつなき息づかひ
六代君は取り縋り

「死んでくれな小金吾。そちが死ぬると、とゝ様に逢

死ぬる金吾めではござりませぬ。聞き入れなければすぐに切腹」

「ア、コレ待つてたも。それ程にまで思やるなら、成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや」

「お氣遣ひ遊ばすな。運に叶ひ後より参ろ」

「必ず待つてゐるぞや」

と言ふ間に近づく提灯の、火影に

恐れ是非なくも、若君連れて落ち給ふ、御心根ぞいたはしき

手負は御跡見送りく

「死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借つてもなんのこの傷で生きられませう。内侍様、六代様、これがこの世のお別れでござります」

と思ふ心も断末魔、知死期も六つの暮過ぎて、朝の露と消えにける

程なく来たる提灯はこの村の五人組、何やらざはく話し合ひ、山坂の別れ途に庄屋作が立ち留まり

「コレ弥助の弥左衛門殿、貴様は鮎商売故、念押す上

ふ事がならぬは」

と泣き入り給へば

内侍はせき上げ

「あれ聞いてたも、子心でもそなた一人を力にする。維盛様に逢ふまでは、死ぬまいぞ／＼となぜ思ふてはたもらぬ。御一門残らず亡び、広い世界を敵に持ち、いつまで存へ居られうぞ。共に殺してたまいの」と歎き給へば

『理り』と、手負はいと涙にくれ

「ム、先君小松の重盛様は日本の聖人、若君様はその孫君、諸神諸菩薩の恵みのない事はござりますまい。末頼みに思し召し、必ず短気をお出しなされな。アレ／＼向ふへ提灯の火影、又も追手の来たるも知れず、若様伴ひこの場を早く、早く」

「イヤ／＼、深手のそなたを見捨て置いて、いづくを当てに行くものぞ。死なば共に」

と座し給へば

「エ、腑甲斐ない。六代様は大事にないか。この傷で

に押しかける。今言ひ付けた鎌倉の侍は聞き及んだ

蜘蛛。何やらこなたの耳をねぶつて、はげる程言ひ付

けたら、『畏まった、畏まった』と滅多無性に請け合

うたが、なんとアリヤマア覚えのあることかや」

「ハテ知れた事、こなた衆も常から俺が性根を知らぬ

か。血を分けた伴でも、見限つたら門端も踏まさぬ弥

左衛門。膝ぶしが砕けても、畏まつたら痺も切らさ

ぬ。シタガ跡からの言ひ付けがもつけの幸ひ、嗟哦の

奥から逃げて来た子を連れた女と大前髪、この村へ

入り込んだと追手からの知らせ。ところで蜘蛛がねぶ

りかけて、捕へたら褒美とある。コリヤまた格別よい

仕事、皆も油断をせまいぞや」

「オ、ソレ／＼、こんな時こなたの息子のいがみの

権、権太郎さんを頼んで置こう」

と五人組、山道行けば

弥左衛門、坂へ降りしも行く先の、手負にばつたり行き当たり、『はつ』と飛び退き気味悪ながら、提灯振り上げそろ／＼立ち寄り

「デモアアむごたらしう切つたはく。旅人さうな
が、追剥おいはぎの仕業しわざならば丸裸にしさうなもの。路銀を当
てに悪者の仕業か」

と悪い子を持つ親の身は案じ過して

「コレく手負殿、手負殿」

と呼べど

答へもなきからに

「さては最早息絶えたか。ア、いとしや、いづくの人
なるぞ。見ればふけた角前髪、袖振り合ふも他生の
縁、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
と回向して、『とかく浮世は老少不定、哀れを見るも
仏の異見、人はいがまず真直ぐに後生の種が大事ぞ』
と思ひ続けて行き過ぎしが

何思ひけん立ち止り、取つゝ置いつの俄かの思案

わが家をさして

すしやの段

春は来ねども花咲かす、娘が漬けた鮓すしならば、なれが
よかると買ひにくる

風味も吉野下市に、売り広めたる所の名物、釣瓶鮓屋の
弥左衛門

留守の内にも商売に、抜け目も内儀が早漬けに
娘お里が片襷、裾に前垂ほやくほやと愛に愛持つ鮓
の鮓、押さへてしめてなれさするうまい盛りの振袖が、
釣瓶鮓とはものらしゝ
締め木に栓を打ち込んで、桶片付けて

「申しかゝさん、昨日とゝさんの言はしやるには、

『明日の晩には内の弥助と祝言さす程に、世間晴れて
女夫めおとになれ』と仰つたが、日が暮れてもお帰らないは
嘘うそかいなあ」

「オ、あの言やる事はいの、なんの嘘であるぞ。器量

のよいを見込みに、熊野参りから連れて戻つて気も心
も知ると、弥助といふ我が名を譲り、主は弥左衛門と
改めて内の事任せて置かしやるは、そなたと娶めあす兼
ねての心。今日は俄かに役所から親父殿を呼びに来て
思はぬ隙入り。迎ひにやるにも人はなし」

「サイナア、折悪う弥助殿も方々から鮓の詠へ、仕
込みの桶が足るまいと、明き桶取りに行かれました
が、もう戻らるゝでござんしよ」

と噂半ばへ

明き桶なな荷にひ戻る男のとりなりも、利口で伊達で色も香
も、知る人ぞ知る優男

娘が好いた厚鬢あつぴんに、冠かむり着せても憎からず

内へ入る間も待ち兼ねて、お里は嬉しく

「アレ弥助さんの戻らんした。待ち兼ねた、遅かつ
た。もしやどごぞへ寄つてかと気が廻つた、案じた」

と女房顔して言ふて見る、さすが鮓屋の娘とて、早い馴
れとぞ見えにける

母はにこく笑ひを含み

「ヤコレ弥助殿、気にかけて下さんな。この吉野郷は
弁財天の教へによつて、夫を神とも仏とも戴いてゐよ
とある天女の掟。その代り程悟めい気も深い。またあり様
は親の孫まご、瓜うりの蔓つるにではござらぬ」
と言ひくろむれば

「これはまあ却つて迷惑。段々お世話の上大切なお娘
御まで下され、御礼の申し様もござりませぬ。さりな
がら、とかくお前には弥助殿、弥助殿と殿付けをなさ
れてさりとは気の毒。やつぱり『弥助、どうせい、
かうせい』とお心安う、ナ申し」

「イヤく、それは赦して下され
「ソリヤまた、何故でござります」

「さればいの。弥助といふ名はこれまで連れ合ひの呼
び名。殿付けせずに『どうせい、かうせい』とは勿体
なうて言ひ憎い。言ひ馴れた通り殿付けさして下さ
れ」

と実まじに夫をば大切に思ふ掟おきてを幸ひに、娘へこれを聞け
がしの、母の慈悲とぞ聞きこえける

お里

弥助は明き桶を板間へ並べてゐるところへ

この家の惣領いがみの権太、門口より乙声で

「母者人、母者人」

と言ひつゝ入れば

お里はびつくり

「また兄さんか、ようお出で」

と揉み手する

「エ、きよとくしい、その面なんぢやい。よう来たがびつくりかい。わりやアノ弥助と、へんうまい事してゐるさうなが、コリヤ弥助もよう聞け。今追ひ出されてゐても竈の下の灰まで俺が物ぢや。今日親父の毛虫が役所へ往たと聞いたによつて、ちと母者人に言ふ事があつて来た。二人なから奥へ失せう」

と睨み廻され

うぢくくと

「これに」

と言ふて立つ弥助

娘も後に引添ふて、一間へこそは入りにけれ

後に母親溜息つき

「コリヤまた留守を考へ無心に来たか、性懲りもない腕白者。そのおのれが心から、嫁子があつても足踏み一つさす事ならぬ。聞きやこの村へ来てゐるげなが、互ひに知らねば摺れ合ふても、嫁姑は顔知らず、眼つぶれと人々に言はれるが面目ない。エ、不孝者め」と目に角を立て変はつたる機嫌に

ぐんにやり、『直ではいかぬ』といがみの権、思案しかへて

「申し母者人、今晚参つたは無心ではござりませぬ。

お暇乞ひに参りました」

「ソリヤなんで」

「私は、遠い所へ参ります程に、親父様もお前にも、随分おめでとう、おめでとう」

と萎れかければ

母は驚き

「遠い所とはそりや何処へ、どうした訳で何しに行

く」

と根問ひは親の騙され小口

『サア、してやつた』と目をしばたゞき

「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、つひに人の物箸片し、いがんだ事も致しませぬに、不幸の罰か、夜前私は大盗人に遭ひました」

「ヒヤア」

「その中に、代官所へ上げる年貢銀、三貫目といふもの盗み取られ、言ひ訳もなく仕様もなく、お仕置きに合はうよりはと覚悟極めてをります。情けない目に合ひました」

とかます袖をば顔に当て、しやくり上げても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の縁へ届かぬ舌ぞ恨めしき

甘い中にも分けて母親、誠と思ひ共に目を擦り

「鬼神に横道なしと年貢の銀を盗まれ、死なうと覚悟はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰、コリヤよう思ひ知れよ」

「ア、アイ、ア、アイ。思ひ知つてはをりますすけれ

ど、どうで死なねばなりますまい」

「コリヤやい」

「ア、アイ、ア、アイ」

「常のおのれが性根故、これも銜りか知らねども、所務分けにと思ふた銀、親父殿に隠してやろ。これでほつとり根性直せ」

とそろく戸棚へ子の蔭で、親も盗みをする母の甘い錠さへ明け兼ねる

「エ、イつい雁首で、こちくがよござりまする」

と仕馴れたるおのが手業を教える不孝

親は我が子が可愛さに地獄の種の三貫目、後をくろめて持つて出で

「なんぞに包んでやりたいが」

と限らない程甘い親

「うまい和郎ぢや」

といがみの権、鮓の明き桶よい入れ物

「これへ、これへ」

と親子して、銀を漬けたる黄金鮓、蓋しめ栓しめ

「サアよいわ、これで目立たぬ提げて去ね」
と親子が工合の最中へ

苦い父親弥左衛門、これも疵持つ足の裏、あたふたとして門口を

「戻つた、明けい」

と打ち叩く

「南無三、親父」

と内には転倒、狼狽へ廻り

「その桶を、こゝへ、こゝへ」

と明き桶と共に並べて親子はひそく、奥と口とへ引き別れ息を詰めてぞ入りにける

「エ、何故明けぬ、何故明けぬ」

と頻りに叩けば

奥より弥助、走り出でて戸を開くる

内入り悪く辺りを見廻し

「コリヤまたどういつも寝てをるか、言ひ付けた鮓どもは仕込んであるか」

と鮓桶を提げたり明けたりがつたがた

「ム、コリヤ思ふ程仕事が出来ぬ。女房共やお里めは何してをるぞ」

「ア、イヤ、只今奥へ呼びませう」

と行く弥助をば

引き留め、内外見廻し表を閉め、上座へ直し手をつかへ

「君の親御小松の内府重盛公の御恩を請けたる某。

何卒御子維盛卿の御行方と思ふ折から熊野浦にて出で合ひ、御月代を勧めこの家へお供申したれども、人目を憚り下部の奉公。あまりと申せば勿体なさ。女房ばかりに子細を語り、今宵祝言と申すも心は娘を御宮仕へ。弥助々々と賤しき我が名をお譲り申したも、いよく助くるといふ文字の縁起。人は知らじと存ぜしに、今日鎌倉より梶原平三景時来たつて、維盛卿を匿へありと退引させぬ詮議。烏を鷲と言ひ抜けては帰れども、邪智深い梶原、もしや吟味に参るも知れずと心巧みは致して置けどもサア、油断は怪我の元、明日からでもわが隠居上市村へお越しあれ」

と申し上ぐれば

維盛卿

「父重盛の厚恩を請けたる者は幾万人。数限りなきその中に、おことが様な者あらうか。昔はいかなる者なるぞ」

と尋ね給へば

「ハ、ア、私めは平家御代盛りの折から唐土硫黄山へ祠堂金お渡しなさるゝ時、音戸の瀬戸にて船乗りす

ゑ、三千両の金分け取りに致した船頭。御詮議あらば

忽ち命を取られんに、ハアありがたいは重盛様、『日

本の金唐土へ渡す我れこそは日の本の盗賊』と御身の上を悔み給ひ、重ねてなんの咎めもなく御暇を下され、この山家へ参つて鮓商売。今日を安楽に暮せど

も、親の悪事が子に報ひ、伴権太郎めが盗み衒り。人

に言はねど心では思ひ知つたる身の懺悔。お恥づかし

うござります」

と語るにつけて

維盛も、栄華の昔父の事、思ひ出だされ御膝に落つる涙

ぞいたはしき

娘お里は今宵待つ、月の桂の殿もふけ、寝道具抱へ立ち出づれば

主は『はつ』と泣く目を隠し

「コリヤ弥助、今言ひ聞かした通り上市村へ行く事

を、必ずく忘れまいぞ。今宵はお里とこゝにゆる

り。かゝと俺とは離れ座敷、遠いが花の香がなうて、

気楽にあらう」

と打ち笑ひ、奥へ行くのも

娘は嬉しく

「テモ粹なとゝさん、離れ座敷は隣り知らず、餅つき

せうと、ホ、をかし。こちらはこゝに天井抜け、寝て

花やろ」

と蒲団敷く

維盛卿はつくづく、身の上または都の空、若葉の内侍

や若君の事のみ思ひ出だされて、心もすまず気も浮かず

打ち萎れ給ひしを

思はせぶりとお里は立ち寄り

「コレイナア、オ、辛気、何初心な、案してぞ。
コレ、二世も三世も固めの枕。二つ並べた、こちや寝
よ」

と先へころりとうたゝ寝は、恋の罨とぞ見えにけり
維盛枕に寄り添ひ給ひ

「これまでこそ仮の情け、夫婦となれば二世の縁、結
ぶに辛き一つの言ひ訳。何を隠さう某は国に残せし妻
子あり。貞女両夫に見えずの掟は夫も同じ事、二世
の固めは赦して」

とさすが小松の嫡子とて、解けた様でも何処やらに、親
御の気風残りける

神ならず仏ならねばそれども、知らぬ道をば行き迷ふ
若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き、『手負の事も
頼まん』と思ひ寄る身も縁の端、この家を見かけ戸を打
ち叩き

「一夜の宿」

と乞ひ給へば

維盛はよい退きしほと表の方、叩く柩に声を寄せ

「ノウなつかしや」

と取り継り、詞はなくて三人は泣くより他の事ぞなき

「まづく内へ」

と密かに伴ひ

「今宵はとりわけ都の事、思ひ暮してゐたりしが、親
子ともに息災で不思議の対面。さりながら、某この家
にゐる事を誰が知らせしぞ。殊にまた、遥々の旅の
空、供連れぬも心得ず」

と尋ね給へば

若葉の君

「都でお別れ申してより須磨や八島の戦を案し、一
門残らず討死と聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてはつか
り暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ者のあ
る故に、小金吾召し連れ御行方を心ざす道追手に出合
ひ、可愛や金吾は深手の別れ。頼みも力もない中に廻
り逢ふたは嬉しいが、三位中将維盛様がこのお姿は何
事ぞ。袖のないこの羽織にコレのおつむりは」
と取り付いて、咽び絶え入り給ふにぞ

「この内は鮎商売、宿屋ではござらぬ」

と愛想のないが愛想となり

「イヤこれ申し、幼きを連れた旅の女、是非に一

夜」

と宣ふにぞ

『断り言ふて帰さん』と戸を押し開き月影に見れば
内侍と六代君

『はつ』と戸を鎖し内の様子、娘の手前もいぶかしく、
そろく立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢の体、

表に内侍は不思議の思ひ

「今のはどふやらわが夫に似たと思へどなり形、つむ
りも青き下男、よもや」

と思ひ給ふ内

戸を押し開いて維盛卿

「若葉の内侍か、六代か」

と宣ふ声に

「ヒヤア、さてはわが夫」

「とゞ様か」

面目なさに維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みて
ぞおはします

涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ

「若い女中の寝入端、殊に枕も二つあり。定めてお伽

の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の事も

思し召し風の便りもあるべきに、打ち捨て給ふは胴

慾」

と恨み給へば

「ホ、オそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐れ
あり。分けてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じと、
われを助けてこれまでに重々厚き夫婦が情け。なにが
な一礼返礼と思ふ折柄娘の恋路。つれなく言はゞ過ち
あらん、かへつて恩が仇なりと仮の契りは結べども、
女は嫉妬に大事も洩らすと弥左衛門にも口留して、
わが身の上は明さず。仇な枕も親共へ義理にこれまで
契りし」

と語り給へば

伏したる娘、堪え兼ねしか声上げて、『わつ』とばかり

に泣き出だす

「コハ何故」

と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば

「ノウこれお待ち下され」

と涙と共にお里は駆け寄り

「まづくこれへ」

と内侍若君、上座へ直し

「私は里と申してこの家の娘、徒ら者憎い奴と思ひ

召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色めづらしい草中

へ絵にある様な殿御の御出で。維盛様とは露知らず

女の浅い心から、可愛らしい、いとらしいと思ひ

染めたが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも知ら

して下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、雲井

に近き御方へ鮎屋の娘が惚れられうか。一生連れ添ふ

殿御ぢやと思ひ込んでゐるものを、『二世の固めは叶

はぬ、親への義理に契つた』とは、情けないお情けに

預かりました」

とどうど伏し身をふるはして泣きければ

維盛卿は気の毒の

内侍も道理の詫び涙、かはく間もなき折からに

村の役人駆け来たり戸を叩いて

「ア、コレく、こゝへ梶原様が見えます。内掃除

しておかれい」

と言ひ捨て、立ち帰る

人々『はつ』と泣く目も晴れ

「いかゞはせん」

と俄かの仰天

お里は早速に心付き

「まづく、親の隠居屋敷上市村へ」

と氣を焦る

「実にその事は弥左衛門、我れにも教へ置きしかど最

早や開かぬ平家の運命。検使を引き受け潔く腹かき切

らん」

と身拵へ

内侍は悲しく

「コレ、この若のいたいけ盛りを思し召し、ひとまづ

こゝを」

と無理矢理に引つ立て給へば

維盛も、子に引かさるゝ後ろ髪、是非なくその場を落ち

給ふ、御運の程ぞ危ふけれ

様子を聞いたかみがみの権太、勝手口より躍り出で

「御触れのあつた内侍六代、維盛弥助めせしめてくれ

ん」

と尻引からげ駆け出だすを

「コレ待つて」

とお里は取り付き

「兄さん、これは一生の私が願ひ、見赦して下され」

と頼めど

聞かず、跳ね飛ばし

「大金になる大仕事、邪魔ひろぐな」

と縫るを

蹴倒し張り飛ばし、最前置きし銀の鮎桶

「これ忘れては」

と引提げて跡を慕ふて追ふて行く

「ノウとゝさん、かゝさん、とゝさん、かゝさん」

とお里が呼ぶ声

弥左衛門

母も駆け出で

「何事」

と問へば

娘は

「コレくく、都から維盛様の御台若君尋ねさ迷ひ

御出であり。積もる話のその中へ詮議に来ると知らせ

を聞き、三人連れで上市へ落としましたを情けない。

兄さんが聞いてゐて討ち取るか生け捕つて褒美にする

と、ソレくく、たつた今追かけて」

と言ふより

びつくり弥左衛門、

「ソレ一大事」

と嗜みの朱鞘の脇差腰にぼつ込み駆け出す向うへ

「ハイ、ハイ、ハイ」

と矢筈の提灯梶原平三景時、家来数多に十手持たせ、道を塞いで

「ヤア老いばれめ、いづくへ行く。逃ぐるとて逃がさうか」

と追取りまかれて『はつ』と吐胸、『先も氣遣ひ、こゝも遁れず』七転八倒心は早鐘、時に時撞く如くなり

「ヤアこいつ横道者、おのれに今日維盛が事詮議すれば、『存せぬ知らぬ』と言ひ抜ける。そのまゝにして帰せしは、思ひ寄らず踏ん込まうため。この家に維盛匿ひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打ち。取るものも取りあへず来たれども、油断の体はおのれを取り逃すまいため。サア首討つて渡すか、たゞし違背に及ぶか、返答せい」

と責めつけられ
叶はぬところと胸をすゑ

「成程、一旦は匿まひないとは申したれども、あまり御詮議強き故、隠しても隠されず。早や先達て首討つたり。御覧に入れんお通り」

と伴ひ入れば

母
娘

「どうなる事」

と氣遣ふ内

鮮桶引提げ弥左衛門、しづく出でて向うに直し

「三位維盛の首、御受け取り下されよ」

と蓋を取らんとするところを

女房駆け寄りちやつと押さへ

「コレ、コレ親父殿、この桶の内にはわしがちつと大事の物を入れて置いた。こなさん明けてどうするぞ」

「オ、オ、われは知るまい。この桶には最前維盛卿のお首を討つて入れ置いた」

「イヤくこの桶にはあなたに見せぬ物がある」

と引き寄せれば

引き戻し

「エ、おのれが何も知らぬ故」

「イヤこなたが知らぬ故」

と妻は銀と心得て争ひ果てねば

梶原平三

「さては、こいつら言ひ合はせ、縛れ括れ」

と下知の下

『捕つた捕つた』と取り巻くところに

「維盛夫婦餓鬼めまで、いがみの権太が生け捕つたり、討ち取つたり」

と呼ばはる声

『はつ』とばかりに弥左衛門

女房

娘も氣は狂乱

いがみの権太はいかめしく、若君内侍を猿縛り、宙に引立て目通りにどつかと引きすゑ

「親父の売僧が三位維盛を熊野浦より連れ帰り、道にて頭を剃りこぼち、青二才にして弥助と名を替へ、この間はイヤモほてくろしい聾詮索。生け捕つて面恥と存じたに、思ひのほか手強い奴。村の者の手を借つて漸々と討ち取り、首に致して持參。イヤ御実檢」

と差し出だす

「ム、ム、でかいたく。剃りこぼち弥助といふは存じながら、先達て言はぬは弥左衛門めに思ひ違ひをさうため。聞き及んだいがみの権、悪者と聞いたがお上へ対して忠義の者、オ、出かいたく。内侍、六代、生け捕つたな。テよい器量。夢野の鹿で思はずも女鹿子鹿の手に入るは天晴れの働き。褒美には親の弥左衛門めが命、赦してくれう」

「ア、イヤく申し、親の命位を赦して貰をと思ふて、この働きは致しませぬわい」

「スリヤ親の命は取られても、褒美が欲しいか」

「ハテ、あの和郎の命はあの和郎と相對。私にはとかくお銀」

と願へば

梶原

「ハ、ハ、ハ、ハ、テ小氣味のよい奴、褒美くれん」

と着せし羽織、脱いで渡せば

仏頂面

「ア、コリヤ〜。その羽織は忝なくも頼朝公のお召し換へ。何時でも鎌倉へ持ち来たらば、金銀と釣り換へ。嘱託すくたくの合紋」

と聞くより戴き

「出来たく。当世かた衞がたりが流行はるによつて、二重取りをさせぬ分別。マようしたものだ」

と引き換へに、縄付き渡せば

受け取つて、首を器に納めさせ

「コリヤ権太、弥左衛門一家の奴等、暫く汝に預くるぞ」

「イヤモお氣遣ひなされますな。貧乏ゆるぎもへ、させませぬわい」

「アさて健気けんげな男おのこめ」

と誉めそやして梶原平三、縄付き

引立て立ち帰る

「ア、これ〜、そのつひでに褒美の銀か、忘れまいぞ」

と見送る隙間

も心は涙

いがみにいがみし権太郎、刃物押さへて

「ム、〜、コレ親父殿」

「エ、なんぢやれ」

「こなたの力で維盛を助ける事は叶はぬ〜」

「エ、言ふないやい〜。今日幸ひと別れ道の傍かたわらに手負の死人、よい身代りと首討つて戻りこの中に隠し置く。コリヤこれを見をれ」

と鮓桶取つて打ち明くれれば

がらりと出でたる三貫目

「ヒヤアこりや銀ぎんぢや、こりやど〜ぢや」

と呆れ果てたるばかりなり

手負は顔を打ち眺め

「おいとしや親父様、私が性根が悪さに御相談の相手もなく、前髪まへがみの首くびを物髪ものかみにして渡さうとは了簡違ひの危ないところ。梶原程の侍が弥助といふて青二才の男に仕立て〜あることを知らいで討手に来ませうか。それと言はぬはあつちも巧み。維盛様御夫婦の路銀みちぎんにせ

油断見合はせ弥左衛門、『憎さも憎し』とひん抱へぐつと突込む恨みの刃

『うん』とのつげに反りかへる

見るに親子は『ハア、ハツ』と、憎いながらも悲しさの

母は思はず駆け寄つて

「コリヤ、天命知れや不孝の罪、思ひ知れや」

と言ひながら、先立つものは涙にて伏し沈みてぞ泣きゐたる

弥左衛門齒噛みをなし

「チエ泣く女房、ナ、〜、何吠えるのぢや。不憫の可愛いと言ふてこんな奴を生けて置くは、世界の人の大きな難儀かたじけなぢやわい。門端かどはたも踏ますなと言ひつけ置いたに内へ引き入れ、大事の、大事の維盛様を殺し、内侍様や若君をよう鎌倉へ渡したな。モ、〜、腹が立つて腹が立つて涙がこぼれて胸が裂けるわい。三千世界に子を殺す親といふのは俺おればかり、天晴れ手柄な因果者いんぐわしやにようしをつた

と抜き身の柄、砕くるばかりに握り詰め、多おほぐりかける

んと盗んだ銀か、重いを証拠に取り違へた鮓桶、明けて

見たれば中には首、『はつ』と思へどこれ幸ひ。月代さかやき

剃つて突きつけたは、やつぱりお前の仕込みの首

「ム、そのまた根性で御台若君に縄を掛け、何故鎌倉へ渡したぞ」

「オ、そのお二人と見えたのはこの権太が女房、

倅

「ヤ、シテ〜維盛様御夫婦、若君はいづくに」

「オ、逢はせませう〜」

と袖より出だす一文笛、吹き立つれば

『折よし』と維盛卿

内侍は茶汲みの姿となり、若君連れて駆け付け給ひ

「弥左衛門夫婦の衆、権太郎へ一礼を。ヤア手を負ふ

たか」

と驚くも

「お変りないか」

とびつくりも、一度に興きようをぞ覚ましける
母は悲しさ手負に取り付き

「かほど正しき性根にて、人に疎まれ譏らるゝ身持ちは何故にしてくれた。常が常なら連れ合ひがむざと手疵も負はせまい。酷い事を」

とせき上げて悔み歎けば
権太郎

「ヤレそのお悔み無用々々。常が常なら梶原が、身代り喰ふては帰りませぬ。またそれさへも疑ふて、親の命を褒美にくれう、忝ないと言ふと早や詮議に詮議をかける所存。いがみと見た故油断して一杯喰ふて帰りは、禍も三年と悪い性根の年の明き時。生まれ付いて諸勝負に魂奪はれ今日もあなたを甘雨。漸々と討ち取り荷物の内になや／＼しき高位の絵姿、弥助が顔に生き写し。合点がいかぬと母人へ銀の無心をおとりに入り込み、忍んで聞けば維盛卿、御身に迫る難儀の段々。この度性根改めずば、いつ親人の御機嫌に預る時節もあるまいと打つてかへたる悪事の裏。維盛様の首はあつても、内侍若君の代りに立つる人もなく、途方に暮れし折からに、女房小仙が伴を連れ、『親御の

るであらうと思ふ程なほそちが憎さ。今直る根性が半年前に直つたら、ノウ婆」

「親父殿、嫁女や孫の顔見覚えて置かうのに」

「オ、俺もそればつかりが」

と咽せ返り、『わつ』とばかり伏し沈む心ぞ思ひやられたり

内侍は始終御涙

維盛卿は身に迫るいとゞ思ひにかきくれ給ひ

「弥左衛門が歎きさる事なれども、逢ふて別れ逢はで死ぬるも皆因縁。汝が討つて帰りたる首は主馬の小金吾とて内侍が供せし譜代の家来。生きて尽くせし忠義は薄く、死して身代る忠勤厚し。これも不思議の因縁

と語り給へば

「アモさても、そんならこれも鎌倉の追手の奴等が皆仕業」

「ホ、言ふにや及ぶ。右大將頼朝が威勢に蔓延る無得心、一太刀恨みぬ残念」

勘当古主へ忠義、何狼狽へる事がある、私と善太を

コレ、かう』と手を廻すれば伴めも、『母様と一緒

に』と共に廻して縛り縄、掛けてもカ、掛けても手が

外れ、結んだ縄もしやら解け、いがんだ俺が直な子を

持つたはなんの因果ぢやと、思ふては泣きしめては泣

き、後ろ手にしたその時の心は鬼でも蛇心でも、堪へ

兼ねたる血の涙。可愛や不憫や女房も、『わつ』と一

声その時に血を、ハ、吐きました」

と語るにぞ

力み返つて弥左衛門

「チエ聞こえぬぞよ権太郎。孫めに縄を掛ける時血を吐く程の悲しさを常に持つては何故くれぬ。広い世界に嫁一人、孫といふのもあいつ一人ぢや。子供が大勢遊んでゐれば、親の顔を目印に苦味の走つた子があるかと、尋ねて見ては『ア、コレ、コレ、子供衆、権太が息子はあませぬか』と問へば子供は『どの権太、家名はなんと』と尋ねられ、俺が口から満更にいがみの権とは得言はず、悪者の子ぢや故にはね出されてを

と怒りに交じる御涙

「実にお道理」

と弥左衛門、梶原が預けたる陣羽織を取り出だし

「これはこれ頼朝が着替とて褒美の合紋に残されし。

ずだ／＼に引き裂いたとて御一門の数には入らねど、

一裂つゝの御手向け。サア遊ばせ」

と差し出だす

「十二、頼朝が着替とや。晋の予讓が例を引き衣を

刺して一門の恨みを晴らさん、思ひ知れ」

と御佩刀に手を掛けて、羽織を取つて引き上げ給へば

裏に模様か歌の下の句

『内や床しき、内ぞ床しき』と二つ並べて書いたる

は、ア、ラ心得ず。この歌は小町が詠歌、『雲の上

は、ありし昔に変はらねど、見し玉簾の、内や床し

き』とありけるを、その返しとて人も知つたるこの歌

を物々しう書いたは不思議。殊に又梶原は和歌に心を

寄せし武士、『内や床しき』とこの羽織の縫目の内ぞ

床しき」

と襟際えりぎわ附際つけぎわ切り解き見れば

内には袈裟衣、数珠まで添へて入れ置いたは

「ヤ、コリヤどうぢや」

「コハいかに」

と呆れる人々

維盛卿

「ホ、才さもさうずさもあらん。保元平治のその昔わが父小松の重盛、池の禪尼ぜんにと言ひ合はせ、死罪に極まる頼朝を命助けて伊東へ流人。その恩報じに維盛を助けて出家させよとの鸚鵡返しか恩返しか。ハ、敵ながら頼朝は天晴れの大将、見し玉簾たまだれの内よりも心の内の床しや」

と衣を取つて、

「これとても、父重盛の御蔭」

と戴き給ふぞ道理なる

人々『はつ』と悦び涙

手負の権太は、這ひ出で摺り寄り

「及ばぬ智恵で梶原を謀たばかつたと思ふたが、あつちが

何にも皆合点。思へばこれまで銜かたつたも、後は命を銜らるゝ種と知らざる、浅まし」

と悔みに近き終り際

維盛卿も

「これまでは仏を銜つて輪廻を離れず。離るゝ時は今この時」

と髻こむぎふつゝと切り給へば

内侍

若君

お里は縊り

「共に尼とも姿を変へ、御宮仕へを赦して」

と願へど

叶はず、打ち払ひく

「内侍は高雄の文覚へ六代が事頼まれよ。お里は兄に

なり代り親へ孝行肝要」

と立ち出で給へば

弥左衛門

「女中の供は年寄の役」

と諸共旅用意

手負を勞いたはる母親が

「ノウコレつれない親父殿、権太郎が最期も近し。死

目に逢ふて下され」

と留むるに

せき上げ弥左衛門

「チエ、現在血を分けた俵を手掛け、どう死目に逢

はれうぞ。死んだを見ては一足も歩かるゝものかい

の。息ある内は叶はぬまでも、助かる事もあらうか

と、思ふがせめての力草。留めるそなたが胴慾」

と言ふて泣き出す父親に

母は取り分け

娘はなほ

「不憫々々」

と維盛の首には輪袈裟わげさ手に衣、手向けの文もんも阿耨多羅

三藐三菩提さんみょうさんぼだいの門出、高雄高野へ引き分くる夫婦の別れ

に親子の名残り

手負は見送る顔と顔

思ひはいづれ大和路や、吉野に残る名物に維盛弥助といふ鮎屋、今に栄ふる花の里、その名も高くあらはせり

道行初音旅

恋と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや
忠と誠の武士に、君が情けと預けられ、静かに忍ぶ都
をば、跡に見捨て、旅立ちて、つくらぬ形も義経の、御
行末は難波津の、波にゆられてたゞよひて
今は芳野と人づての、噂を道の枝折にて、大和路
指して、慕ひ行く

見渡せば、四方の梢もはこるびて、梅が枝諷ふ歌姫の、
里の男が声々に

わが妻が天井抜けて据ゑる膳、昼の枕はつがもなや
オ、つがもなや

おかし鳥の一節に、人も藁屋の育ちにも、春は羽根つ
く、手鞆ひいふうつくぐくと、聞けば、こち風音添へて
去年の水を

と互ひに形見を取り納め

雁と燕はどちらが可愛、やゝを育つる燕が可愛
花を見捨つる雁金ならば、文の便りもまたの縁

エ、さうぢやいな、エ、さうぢやいな
諷ふ声々面白や

「げにこの鎧を給はりしも、兄継信が忠勤なり」

誠にそれよこしかたの、思ひぞ出づる壇ノ浦の、海に

兵船平家の赤旗、陸に白旗、源氏の強者、『あらもの

くくしゃ』と夕日影に長刀を引きよはめ、『何某は平家
の侍、悪七兵衛景清』と名乗りかけく、なきと立てく
なき立つれば

花に嵐の散りくくぱつと、この葉武者

『言ひ甲斐なしとや方々よ、箕尾屋四郎、これにあり』
と渚に丁ど討つてかゝる

刀を払ふ長刀の、えならぬ振舞ひいづれとも

勝り劣りも浪の音、打ち合ふ太刀の鏝元より、折れて引
く汝、かへる雁

勝負の花を見捨つるかど、長刀小脇にかい込んで、兜の

徳若に御万歳と君も栄へまします、愛敬ありやたのもの
しや

さぞな大和の人ならば、御隠れ家をいざ訪はん
われも初音のこの鼓、君の栄へを寿て、昔を今になす
よしもがな

谷の鶯な、初音の鼓、初音の鼓

調べあやなす音につれて、つれてまねくさ
遅ればせなる忠信が旅姿、背に風呂敷をしつかと背たら
負ふて、野道畦道ゆらりく、軽い取りなりいそくと
目立たぬ様に道隔て、女中の足と侮つて

「さぞお待ち兼ね、こゝ幸ひの人目なし」
と姓名添へて給はりし、御着長を取り出だし、君と敬ひ
奉る

静は鼓を御顔と、よそへて上に沖の石

「人こそ知らね西国へ、御下向の御海上。波風荒く

御船を、住吉浦に吹き上げられ、それより芳野にまし
ます由」

「やがてぞ参り候はん」

鋳を引掴み

後へ引く足よろくくく

向ふへ行く足たじくくく

むんずと鋳を引き切つて、双方尻居にとつかと座す

『腕の強さ』と言ひければ

『首の骨こそ強けれ』と

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

「ホ、ホ、ホ、ホ、」

笑ひし後は入り乱れ、手繁き働き兄継信、君の御馬の矢
面に駒を掛け据ゑ立ち塞がる

「オ、聞き及ぶその時に、平家の方には名高き強弓。

能登守教経と名乗りもあへずよつ引いて、放つ」

「矢先は恨めしや。兄継信が胸板にたまりもあへず真
逆様」

あへなき最期は武士の、忠臣義士の名を残す、思ひ出づ
るも涙にて、袖は乾かぬ筒井筒
いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬ
る御契り、なかは朽ちしかるべきと、互ひに諫め諫め

られ、急ぐとすれどはかどらぬ、芦原峠かうの里、土田
六田も遠からぬ、野路の春風吹き払ひ、雲と見紛ふ三芳
野の、麓の里にぞ

河連法眼館の段

鶯の声なかりせば雪消えぬ、山里いかで春を知らまし
春は来ながら春ならぬ、九郎判官義経を御慰めの琴三味
や、河連法眼が奥座敷、音締めも世上忍び駒
琴柱に立つる雁金も、春を見捨てぬ志、げに頼もしき持
てなしなり

かゝる所へ取り次ぎの侍まかり出で

「佐藤四郎兵衛忠信殿、君の御行方を尋ね御出でな
り」

案内に連れて入り来たる四郎兵衛忠信、御座の間のこな
たに出で、たへて久しき主君の顔、見るも無念のあら
涙、さし俯いて詞なし

大将御機嫌斜めならず

「汝に別れこゝかしこ、鎌倉殿の御詮議強く、身の置
き所なかりしに、東光坊の弟子河連法眼に匿はれ、心
ならざる春を迎へ、暫くの命を継ぐ。わが姓名を譲り

しその方、命全くある事、わが運のまた尽きざる所。
ホ、才頼もし悦ばし。その砌預けたる静はいかゞ
なりしぞ」

と御尋ねありければ、

忠信いぶかしげに承り

「コハ存じがけなき御仰せ。八島の平家一時に亡び、
天下一統の凱歌を上げ給ふ、折から告げ来る母が病
氣、聞こし召し及ばれ御暇給はつて、本国出羽へ帰り
しは、去年三月。程なく別れし母が中陰、忌中に合戦
の疵口おこつき、破傷風という病となり、すでに命
も危き半ば、御兄弟の御仲さけ、堀川の御所没落と承
はる口惜しき。胸を煎る程重る病氣、無念さ余つて腹
切らんとは存せしかど、せめては主君の御顔、今一
度拝し奉らんと、念願叶ひて本復遂げ初立ちの長旅、
忍びの道中恙なくこの館に御入りと承はり、只今參
つた忠信に、姓名を給はりし、イ、ヤ静御前を預けし
なんと御詮の趣き、かつて身に覚え候はず」
と言はせもあへず氣早の大将

「ヤアとぼけな忠信。堀川の館を立ち退きし時、折よ
く汝国より帰り、静が難儀を救ひし故、わが着長を
汝に与へ、九郎義経という姓名を譲り、静を預け別れ
しその方。世になきわれを見限つて、静を鎌倉へ渡せ
しな。義経が在処捜しに来たか。只今国より帰りしと
は、まぎくしき偽り表裏、漂泊してもうつけぬ義
経、欺らんとは推参なり。不忠二心の人外め、アレ
引括つて面縛せよ。亀井、駿河」
と腹立ちの

声に駆け来る二人の勇士、裾ばせ折つて忠信が弓手馬手
に反打ちかけ

「委細あれにて皆聞いた。サア、腕廻せ四郎忠信」

「静御前の御行方、明白に白状せよ。たゞし踏付け縄

掛けうか」

「拷問して言はせうか」

「サア、どうぢや、どうぢや」

とせりかけられてせん刀、差添共に投げ出だし

「兩人待つた鈍忽すな」

「ヤア待てとはたゞし言ひ訳あるか、サア聞こう」
「サアなんと、なんと」

「なんと、なんと」

に難儀の最中

「静御前の御供申し、四郎兵衛忠信殿御出でなり」

と奏者が声に

人々仰天

「ナニ、忠信がまた来たとは、合点行かず」

と聞きもあへず

以前の忠信突立ち上がり

「やうわが名を銜るは何でも曲者、引括つて大将への

面晴せん」

と駆け行くを

「ヤアならぬく。詮議の済むまで動かさぬ」

と亀井が向うを支えたり

「ヤアさなせそ六郎、忠信これにある上にまた忠信が
静を同道。ム、何にもせよ子細ぞあらん。片時も早く
これへ通せ」

『あつ』と亀井は次の間へ

わが身危ぶむ忠信は、黙して様子を窺へば

別れ程経し君が顔、見たさ逢ひたさどつかはと、河連が
奥の亭、歩み来る間もとけしなく

「ノウわが君か懐かしや」

と人目厭はず継り付き、恋しゆかしの溜々を涙の色に知
らせけり

「オ、女心に歎くは理り。別れし時言ひ聞かせし

如く、人の情けに預かる義経、輪廻きたなき振舞なら

ねば、つれなくはもてなしたり。忠信を同道とや、い

づくにあり」

と尋ね給へば

「たつた今次の間まで連れ立つて参りしが、こゝへは
まだか」

と見廻しく

「それくくく、ても早うこゝへ来てぢや。一緒に御
目に掛かるものを、ちつとの間に先へ抜けがけ。まだ
軍場かと思ふてか。まんがちな人ではある」

と恨み口なる

詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信

「わが君もその如く覚えなき御尋ね。拙者めは今の

先、出羽の国より戻りがけ。去年御暇申してから、御

目に掛かるは只今初めて」

「エ、あの人のぢやらくくと、てんがうな事はつか

り」

「ア、イヤてんがうでなし、大真実」

「アレまだ、真顔で欺すのか」

と何気も媚く詞の内

立ち戻る亀井六郎

「静様同道の忠信、引立て来たらんと存せしところ、
次の間にもありあはさず、玄関長屋所々方々を尋ねて
も相知れず候」

と申すに

心迷はせ給ひ

「コレ静、こゝに居るはその方を預けたる忠信なら
ず。只今国より帰りしと物語りする内、忠信静を同道

との案内。二人ある内にも見えざるは不審者。面体似

たる贗者ならずや。静心が付かざるか」

と仰せの内に

忠信を、つれづれと打ち眺め

「ハアどうやらそう仰やれば、小袖も形も違ふてあ

る。お待ち遊ばせや。それか、ムそうぢや、思ひ当る

事がある。君が形見と別れし時給はりし初音の鼓、御

覧遊ばせ、この様に肌身も離さず手に触れて、忠信の

介抱受け、八幡山崎小倉の里、所々に身を忍びあたり

しに、折々の留守の内、君恋しさのこの鼓、打つて慰

む度々に、忠信帰らぬ事もなく、その音を感じ堪ゆる

事、ほんに酒の過ぎた人同然。打ちやめばきよるりつ

と何気ない顔付きは、マよくく鼓が好きそうなど、

初手は思ひ二度三度、四度目には、テモ変つた事、ま

た五度目は不思議立ち、六度目には怖げ立ち、それよ

りは打たざりしが、君はこゝにと聞きつけて、心せく

道忠信にはくれた時、鼓の事を思ひ出し、打てば不思

議や目の前に、来るともなく見えたるは女心の迷ひ目

かと、思ふて連れ立ち来たりしに、またこの仕儀はど
うぞいの「
と申し上ぐれば

義経公

「ムウ、鼓を打てば帰り来るとは。ムそれぞ良き詮議
の近道、静、そちに言ひ付ける。その鼓を持つて同道
した忠信を詮議せよ。あやしい事あらはこの刀で」
と投げ出だし

「わが手で打たれぬ鼓の妙音、それを肴に一献酌ま
ん。早や／＼鼓打て／＼」

と言ひ捨て奥に入り給へば

亀井

駿河も忠信に、引添ひ

てこそ入りにけれ

園原や、帚木ならでありと見し、人の身の上いぶかし
く、窺ひ出づる足音も

静は君の仰せを受け、手に取り上げて引き結ぶ、辛氣真

機転の笑ひ

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、オ、あの人の氣疎ひ顔。久

しぶりの静が舞ひ、見やうと御意遊ばす故、八島の

軍物語を、舞ひの稽古

と鼓を早め、かくて源平入り乱れ、船は陸路へ陸は磯
へ、漕ぎ寄せ打ち出で打ちならず

鼓にまたも聞き入つて、余念たはひもなきところを、

「忠信、やらぬ」

とまた切りかくる

太刀筋かはしてかいくぐるを

付け入る柄元しつかと取り

「なに科あつて騙し討ちに、斬らるゝ覚えかつてな
し」

と刀たぐつて投げ捨つれば

「贗忠信のサア白状、仰せを受けた静が詮議、言はず
ばかうして言はする」

と鼓追取りはた／＼

女のか弱き腕先に、打ち立てられて

紅をない交ぜの、調べ結んで胴掛けて手の内締めて肩に
上げ、手品もゆらに打ち鳴らす、声清々と澄み渡り、心
耳を澄ます妙音は、世に類なき初音の鼓

かの洛陽に聞こえたる会稽城門越の鼓、かくやと思ふ
春風に

誘はれ来たる佐藤忠信、静が前に両手をつき、音に聞き
取れしその風情、すはやと見れど打ち止まず、なをも様
子を調べの音色、聞き入り聞き入る余念の体

『怪しき者』とは見て取る静、折よしと鼓をやめ

「遅かつた忠信殿、わが君様のお待ち兼ね、サア／＼

奥へ」

と何気なき詞に

「はつ」

とは言ひながら、座を立ち遅れて差し俯むく

油断を見済まし切り付くるを

ひらりと飛び退き飛びしさり

「コハ、なんとなさるゝぞ」

と咄められて

「ハア、ハア、ハ、はつ」

と謝り入つたる忠信に

鼓打ち付け

「サア白状、サア、サア、サ、サ」

と詰め寄せられ

一句一答詞なく、たゞひれ伏してゐたりしが

漸々に頭をもたげ、初音の鼓手に取り上げ、さもうや

／＼しく、押し戴き／＼、静の前に直し置き、しづ／＼

立つて、広庭へ降りる姿もしほ／＼と、みすぼらしげに

手をつかへ

「今日が日まで隠しおゝせ人に知らせぬ身の上なれど

も、今日国より帰つたる誠の忠信に御不審かゝり、難

儀となる故よんどころなく、身の上を申し上ぐる始り

は、それなる初音の鼓。桓武天皇の御宇、内裏に雨乞

ひありし時、この大和の国に千年功ふる牝狐牝狐。

二疋の狐を狩り出だし、その狐の生皮をもつて拵へた

るその鼓。雨の神を諫めの神楽、日に向かうてこれを

打てば、鼓は元より波の音。狐は陰の獣ゆえ、水を

発して降る雨に、民百姓は悦びの声を初めて上げしより、初音の鼓と名付け給ふ。その鼓は私が親、私めはその鼓の子でござります」

と語るに

ぞつと怖げ立ち、騒ぐ心を押し鎮め
「ム、そなたの親はこの鼓、鼓の子ぢやと言やるかは、さてはそなたは狐ぢやの」

「ハア。成程、雨の祈りに二親の狐を取られ、殺されたその時は、親子の差別も悲しい事も、弁へなきまだ子狐。藻を被く程年も長け、鳥居の数も重なれど、一日親をも養はず、産みの恩を送らねば、豚狼にも劣りし故、六万四千の狐の下座に着き、たゞ野狐とさげしまれ、官上りの願も叶はず、親に不幸な子があれば、『ヤイ畜生よ、野良狐』と人間ではおつしやれども、鳩の子は親鳥より枝を下がつて礼儀を述べ、鳥は親の養ひを育み返すも皆孝行、鳥でさへその通り。まして人の詞に通じ、人の情けも知る狐。なんぼ愚痴無智の畜生でも、孝行といふ事を知らいでなんと致し

たい、親大事、親大事と思ひ込んだ心が届き、大将の御名を下されしは、人間の果を請けたる同然。いよ／＼親がなほ大切、片時も離れず付き添ふ鼓。静様はまたわが君を恋ひ慕ふ調べの音、変わらぬ音色と聞こゆれども、この耳へは二親が物言ふ声と聞こゆる故、呼び返されて幾度か戻つた事もア、ござりました。只今の鼓の音は、私故に忠信殿、君のご不審蒙つて、『しばらくも忠臣を苦しませは汝が科、早や／＼帰れ』と父母が、教への詞に力なく、元の古巢へ帰ります。今までは大将の御目を掠めし段、お情には静様、お詫びなされて下さりませ」

と縁の下より伸び上り、わが親鼓に打ち向ひ、交はず詞の尻声も涙ながらの暇乞ひ、人間よりは睦まじく

「親父様、母様、お詞を背きませず、私はもう御暇申します。とは言ひながら、お名残り惜しかるまいか、お名残惜しかるまいか。二親に別れた折はなんにも知らず、一日々々経つにつけ、暫くもお傍にあたい産みの恩が送りたいと、思ひ暮らし泣き明かし、焦れた月

ませう、知らいでなんと致しませう。とは言ふものゝ親はなし、まだも頼みはソ、その鼓。千年功ふる威徳には、皮に魂留まつて、性根入れたはずなはち親。付き添うて守護するは、まだこの上の孝行と思へども、浅ましや禁中に留め置き給へば、八百万神宿直

の御番、恐れあれば寄り付かれず。頼みの綱も切れ果てしは、前世に誰を罪せしぞ、人のために仇する者、狐と生れ来るといふ、因果の経文ア、恨めしく、日に三度夜に三度、五臓を絞る血の涙、火焰と見ゆる狐火は胸を焦する炎ぞや。かほど業因深き身も、天道様の御恵みで、不思議にも初音の鼓、義経公の御手に入り、内裏を出づれば恐れもなし、ハア嬉しや悦ばしやと、その日より付き添ふは義経公の皆お陰。稲荷の森にて忠信が在り合はさばとの御悔み、せめて御恩を送らんと、その忠信になり変り、静様の御難儀を救ひました御褒美とあつて、勿体なや畜生に清和天皇の後胤、源九郎義経といふ御姓名を給はりしは、そら恐ろしき身の冥加。これといふもわが親に孝行が尽くし

日は四百年。雨乞ひ故に殺されしと思へば照る日がア、恨めしく、曇らぬ雨は我が涙。願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴れし妻狐、中に設けし我が子狐、不憫さ余つて幾度か、引かるゝ心を胸慾に荒れ野に捨てゝ出でながら、ア、飢えはせぬか、凍えはせぬか、もし獵人に取られはせぬか。我が親を慕ふ程、我が子も丁度この様に我を慕はふかと案じ過ぎがせらるゝは、切つても切れぬ輪廻の絆、愛着の鎖に繋ぎ止められて、肉も骨身も碎くる程、悲しい妻子を振り捨てゝ、去年の春から付き添ふて丸一年経つや経たず。『往ね』とあるとてなんとマア、『あつ』と申して往なれませう、

『あつ』と申して往なれませうかいの。お詞背かば不孝となり、尽くした心も水の泡、切なさが余つて帰るこの身はなんたる業。まだせめてもの思ひ出に、大将の賜はつたる源九郎をわが名にして、末世末代呼ばるゝとも、この悲しさはなんとせん。心を推量し給へ」

と泣いつ口説いつ身悶へし、どうぞ伏して泣き叫ぶは、

大和の国の源九郎狐と言ひ伝へしも哀れなり

静はさすが女気の、彼が誠に目も潤み、一間の方に打ち向ひ

「我が君、それにましますか」

と申す内より

障子を開き

「オ、委しく聞き届けし。さては人にてなかりしな。

今までは義経も狐とは知らざりし。不憫の心」

とありければ

頭をうなだれ礼をなし

御大将を伏し拝みく、座を立ちは立ちながら、鼓の方を懐かしげに見返り、見返り行くとなく、消ゆるともなき春霞、人目臙に見えざれば

大将哀れと思し召し

「アレ呼び返せ鼓打て、音に連れまとも帰り来ん。

鼓、鼓」

とありけるにぞ

静はまとも取り上げて打てば不思議や音は出でず

「これは、これは」

と取り直し、打てども打てども『コハいか』ちいともぼうとも音せぬは

「ハアさては、魂残すこの鼓、親子の別れを悲しんで音を止めたよな。人ならぬ身もそれ程に子故に物を思ふか」

と打ち萎るれば

義経公

「オ、われとても生類の恩愛の節義身に迫る。一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ、日蔭鞍馬に人と成りせめては兄の頼朝にと、身を西海の浮き沈み、忠勤仇なる御憎しみ、親とも思ふ兄親に見捨てられし義経が、名を譲つたる源九郎は前世の業、われも業、そもいつの世の宿酬にて、かゝる業因なりけるぞ」

と身につまざるゝ御涙に

静は『わつ』と泣き出だせば

目にこそ見えね庭の面、我が身の上と大将の御身の上を一口には、勿体涙に源九郎、保ち兼ねたる大声に、『ク

ワイ』と叫べば、われと我が姿を包む春霞、晴れて形を頭はせり

義経御座を立ち給ひ、手づから鼓取り上げて

「ヤイ源九郎、静を預かり長々の介抱、詞には述べ難し。禁裏より給はり大切の物なれども、これを汝に得さする」

と差し出し給へば、

「なに、その鼓を下されんとや。ハア、ハア、ハアありがたや忝なや。焦れ慕ふた親鼓、御辞退申さず頂戴せん。重々深き御恩の御礼、今より君の影身に添ひ、御身の危きその時は一方を防ぎ奉らん。返すくも嬉しやな。オ、それよそれ、身の上に取り紛れ申す事忘つたり。一山の悪僧ばら今宵この館を夜討ちにせんと企てたり。押し寄せさするまでもなし。わが天変の通力にて衆徒を残らず謀つて、この館へ引き入れく、真向立割車切、また一時にかゝつし時、蜘蛛手かくなは十文字。あるいは右袈裟左袈裟、上を払へば沈んで受け、裾を払はゞひらりと飛び、軽捷秘術は

得たりや得たり、御手に入れて亡ぼすべし。必ずぬからせ給ふな」

と鼓を取つて礼をなし、飛ぶが如くに行末の、後をくらまし失せにける

河連法眼館奥庭の段

失せにける

始終の様子詳らかに聞いて驚く四郎兵衛、御前に進み出で

「生類の誠ある弁舌にて、大将の御疑ひも某が心も晴れてこの世の大慶上なし」

と申す詞も終わらぬ所へ

河連法眼罷り出で

「怪力乱神を語らずといへども、かの源九郎が申せしは一山の衆徒、今宵夜討ちに来る条、敵を引き受け戦はんか、討つて出で申すべきや。賢慮いかが」

と伺えば

四郎兵衛忠信

「良き計略ごさんなれ。狐に譲り給ひしも元は拙者に給はる姓名。君に代はつて討死せば、一旦事は鎮まら

ん。ひらさら御免を蒙りたく存じ奉り候」

と余儀なき願ひに

御大将

「われ思ふ子細あれば、暫くこの場は立ち退かれず。我が名を名乗り衆徒らを謀れ。汝死すれば我も死ぬ。必ず討死すべからず」

と人徳厚き御詞に出で行く跡を

見送つて

「静、来たれ」

と打ち連れ奥にぞ入り給ふ

かくとしら刃の大長刀、石突土に突き鳴らし、衣の下は海老胴鎖、頭は袈裟にひん纏ひ、ゆらりゆらりと入り来たるは、ただ者ならぬ横川の覚範、大庭に仁王立ち

「河連殿はいづくにある。客僧これへ参入せり。とく

く対面々々」

と呼ばはりながら歩み来る

こなたより

「ヤアく平家の大将能登守教経、九郎判官義経がと

くよりこれに待ちかけたり」

と障子をさつと押し開く

見るより覚範望むところ、長刀柄長く搔ひ込んで、飛びかゝらんず顔色に

ちつとも憶せず、にっこり笑ひ

「げに紅の旗印は衆徒に奪せど隠れなし。水練に名を得し教経、八島の沖に入水と見せ底を潜つて浮かみ出で、この世にあるとはとくより知る。天命に尽きたる平家の刃、義経が身に立たば、サ、立て、見られよ能登守」

と言はせもあへず上段に、薙で掛かるを

小太刀にて、あしらひ兼ねて義経は、詞にも似ず逃げて入る

「逃さじやうじ」

と奥の間の、隔ての障子蹴はなしく駆け行く向ふに、こはいかに

玉座を設け安徳帝、臆たげなる御姿

「何とてここにまします」

と胸打ち騒ぎ奏聞す

君は気高き御声にて

「教経も知る如く、八島の内裏を遁れ出で、頼みなき世を待ちつるに、義経にめぐり逢ひ、源氏の武士の情けある心に恥じて知盛は、我が事をくれぐれと頼みて海へ入りたるぞ。今教経に逢ふ事も皆義経が計ひ」

「エ、しなしたりく。知盛も教経もあつぱれ企みし計略知謀、義経に見さがされしは、よつく武運に尽きたるな。今又奥へ逃げ込みしも、龍顔に逢はせ奉る武士の情けであつたよな。勝負は重ねて、いで帰らん。それまでは教経が隠れ家へ遷幸あれ。いざや御幸の御供」

とかき抱き奉り、立ち出でんとするところに

亀井

駿河、駆け出で

「天皇を囿にして後汚き逃げ足、門打つたれば遁れなし。サア勝負あるか降参あるか、二つに一つの返答」

言はせも果てずぐつとぬめ付け

「帝を我に渡したる義経が寸志を思ひ助け置くを、逃げるなどとは案外千万。飛びしきつて三拜せよ」

「ヤア人もなげなる広言、組み留めて鼻明かさん」と砂踏み散らして詰め寄れば

「ヤア待て汝ら、粗忽すな」

と声を駆けて義経公、烏帽子狩衣引き繕ひ、物具ならぬ御出立

「鎮まれ方々、いざ義経も天皇を見送り奉らん。義経一人帰せしとて、天に入る徳もなく、地に入る術もあらばこそ、何条遁れなき命、汝らが手に掛けず、この所にあり合はさぬ忠信に討たすれば、兄継信が敵を討ち修羅の妄執散ずる道理。教経は世狭き身、義経も世を憚る身、互ひに城も楯もなき戦場芳野の花矢倉に勝負々々を決すべし。天皇入水と披露して、内裏表済んだれば、たとへ勝つとも負くるとも、君に過ち致されな」

「ホ、神妙の詞満足せり。さらばよ義経、さるにて

も、帝の御命助けたる情けの例には、教経とも能登守

とも名乗つては敵対はぬが我が返報。再会の名は横川の覚範、芳野山にて忠信に出つくはして勝負せん。互

ひの命はその時く。行幸なるぞ」

と呼ばはつて、また抱き上ぐる安徳帝

「供奉は門前人目あり。赦させ給へ」

と敬つて、頭は下けても顔と顔

睨んで別るゝ両大将、源九郎義経の義といふ字を讀と

音、源九郎ぎつね付き添ひし、大和言葉の物語、その名

は高く聞こへける